

明治四十五年二月二十八日發行(每月一回卅日發行)



道

求

第壹號

第拾壹卷

求道第拾壹卷第壹號目次

求道

◎人生、慈悲、救済

講義

◎『教行信證』信卷三信釋(完結)

近角常觀

第十二席

結釋(大心海釋)

告白

◎私が涙の種

藤本廣惠

講話

◎如來利他の大悲

近角常觀

一、眞の罪惡觀 二、他利々他の深義 三、私の話に

求道

第拾壹卷  
第壹號

人生、慈悲、救済

○現代の思想界に於て、徹底し得ざる根本の病弊は、人生を實驗することを直に自覺と名け、若くは信仰と名けんと欲することである。

○詳しく言へば人生其物を眞實なるものと味ひ、生活其儘を意義あるものたらしめんと思ふことである、かく味ひかく實驗することを救済と名づけ、信仰と名け様と思ふことである。

○此の如く考ふることは人生自らが人生夫自身を救はんと欲することになるものゆへ、恰も自身の手を以て自身の體を上げんとする様なものであつて遂に不可能である。

○信仰の徹底し得ざる根本は、救はるべき人生と救ふべき力とを一元に考へるからである、自力といふはこの事である、自己が自己を救はんとするといふことは不可能である。

○救済といふことは全然二元的である、罪惡なる自己と之を救済したまふ如來と全然二者である、而して此罪惡なる自己

唯一つ異つた處 四、信仰上誰も抱く思ひ 五、全く品代はりたる慈悲 六、仰せのきびしい丈け慈悲も深い 七、力なくしてをはる時 八、夫れは夫れをして置いて 九、佛かねてしろしめして

時報

◎求道學舎日曜講話概況

講

求道學舎

(本郷區森川町一番地)

毎日曜午前九時

第二 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

話

第三 求道會

(日本橋堀込町説教所)

毎月二日午後七時

本誌一月號休刊仕り候也

の爲に無限大悲の御力を加へたまへばこそ他力である。

○親鸞聖人が他力と言ふは如來の本願力也と申されたは是である、他力と言ふは眞實他より力を加へたまへばこそ他力である、近時の思想界の様なれば他力と考へることである、他力と自覺するのである、昔の信者が他力になれぬと歎くのも同様である。

○眞實の菓子と興へられぬものが菓子を食べた氣持になれる筈はない、菓子が興へらるればこそ菓子が味へるのである、此苦痛の人生と、慈悲の如來とは全然二元でなくては他力の他力たる價値はない。

○慈悲の御力を苦海沈淪の我等に加へたまふのである、是が救済である、曇鸞大師が、如來威神を加へたまふにあらずんは將た何を以てか達せん、所以に仰て告ぐと言はれたのが實に他力の眞面目である、故に親鸞聖人が『教行信證』信卷に、乃ち如來の加威力に由るか故なり、博く大悲廣慧の力に因ての故なりとあるが、實に此曇鸞大師の所謂如來の加へたまひし威神力を實驗されたる告白である。

○人生問題、信仰問題に昔も今も區別はない、趣こそ異れ、同一の禍資に陥りてもがきつゝあるのである、昔の信者が頂

けぬ、難有くなれぬ、得られぬ、信せられぬ、喜ばれぬといふて苦しみつゝあるのである、既に得るとか、信するとか、況んや頂くとか、難有いとか言ふ已上は、既に得べき、信すべき又與へらるべき他の御力を仰ぎつゝあるてはないか、而して其御力に目を付けずして獨り芝居をせんと企てつゝある。

○現時の青年の人々が實驗出来ぬ、信せられぬといふことは如來の慈悲に接せずして接したるが如く感ぜんと無益に試みることになる、偶々感じた、信じたといふことが真に如來の御力に接したることにあらずして、自分極めに極めたことになり安い、昔の信者が難有がつたり、御助けときめこんで安心するのと同じことである。

○然らば他力の眞面目は如何と言へば、親鸞聖人が本願招喚の勅命也と仰せられたが是である、勅命である、招喚の聲である、西岸上に人ありて喚て曰くである、阿彌陀如來の仰せられけるやうはである、蓮如上人が當流は阿彌陀如來の御掟なりと仰せられたのが是である。

○人生は徹頭徹尾苦痛の人生である、我等は罪惡深重、煩惱熾盛の塊である、此世界は火宅無常夢の如く幻の如くである、實に難度海である、無明の闇である、自ら渡るべからず、自ら明

らかなるべからず、生死の苦海である、無明の大夜である。○かくの如き人生をみそなはして悲愍止むべからざる大悲である、坐視すべからざる如來にてまします、無明の大夜をあらはれみて、法身の光輪はもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界には影現する、われらが人生を悲愍したまふ大慈大悲が如來より生じたまひしが盡十方無碍光如來にてまします。

らかなるべからず、生死の苦海である、無明の大夜である。○かくの如き人生をみそなはして悲愍止むべからざる大悲である、坐視すべからざる如來にてまします、無明の大夜をあらはれみて、法身の光輪はもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界には影現する、われらが人生を悲愍したまふ大慈大悲が如來より生じたまひしが盡十方無碍光如來にてまします。

○じゃによつて我等は此大悲大願の生起本末を聞かなければならぬ、親鸞聖人が自己の心を申べられた『正信偈』に、先づ法藏菩薩因地のことを示されたのが即ち佛願の生起本末である。

○五劫思惟の願といふことが我等が無戒破戒の有様、愚痴無智の有様をみそなはして、何れの行もよびがたきことを鑒察したまひて、其愚痴無智、破戒無戒の輩を飽まで見捨てざる無限大悲の親心を示したまひし本願招喚の靈勅が唯、南無阿彌陀佛である。

○其愚痴無智破戒無戒の輩といふは他にあらず、即愚禿親鸞の一身である、聖人のつねのまほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すればひとに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとす。

ちぼしめしたちける本願のかたじけなさよとは、親鸞聖人が業報の人生を飽まで見捨てぬ大悲が、五劫思惟の親の御苦勞であることをいたゞかれたる告白である。

○若しや、我等が業報を免れ得たなれば、彌陀の五劫思惟の御苦勞はいらぬことになる、我等の人生は業報の人生である、卵の毛羊の毛のさきにゐる塵ばかりも、つくる罪の宿業にあらずといふことなしてある、千人殺すも、一人も殺さぬも、皆宿業である、一分も一厘も人力をもて左右すべからず、

我身は現に是れ罪惡生死の凡夫曠劫より已來常に没し、常に流轉して、出離の縁あることなしとあるが是である。

○併注意すべきことは此の如く業報によりて一步も左右することの出来ぬといふことを、直ちに如來の命じたまふことと考へるのは大なる誤である、是一元に陥る弊である、また人生は流轉しつゝあると見たのが實驗である、直覺であるといふのも矢張一元に陥るのである、業報に縛られて如何ともすべからず、生死海中に流轉して出離すべからざる有様が人生の苦痛である、聖人が所謂、無始より已來一切の群生海無明海に流轉し、諸有輪に沉迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし、法爾として眞實の信樂なしと仰せられたが是であ

○法爾として眞實の信樂なしである、我等は業報のまに／＼如來の命と安んずることが出来るなれば法爾として安心出来るのである、流轉の人生に浮沈しながら安んずることが出来るなれば弘誓の願はいらぬのである、『涅槃經』の一切衆生悉有佛性も他力から言へば本來の佛性は一點もないのである、一切の群生海無始より已來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心なく虚假誑僞にして眞實の心なしである。

○親鸞聖人の絶對他力の教の特色は、人生の上に一點の光を止めぬ點にある、其代りには如來の御慈悲に於て絶對の力ましまして、如何なる罪惡の底までも手を廻はし、如何なる地獄の下までも光の徹せざることなき御慈悲が無碍光である、無邊光である、難思の弘誓である、本願の大船である、船といふ譬喩はかゝる罪業深重凡愚底下のものを浮ばしむる力をたとへたのである、其力とは即慈悲である。

○如來の本願といふことは我等が罪深きだけそれだけの悲憫して、飽まで眞實清淨の心を以て向ひたまふことである、弘誓といふことは如何なる不眞實に對しても之を見捨てずして、不實なるものも其眞實のために頭が下りて感泣するまで

徹底せしめずば止まぬといふ眞實をいふ、眞實といふものは眞實だけで獨りだちするものではない、いかなる不實に對してもさらに變らぬものが眞實である、常に眞實が變らぬばかりではない、不實なるものが其眞實に變へられて仕舞ふまで立て通す眞實が、如來の眞實である、この意味を親鸞聖人が、是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫したまひて、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の修したまふ所、一念一刹那も清淨ならざることなし、眞心ならざることなしとあるが是である。

○我等が如何にしぶとき罪惡のものなれども、如來の無限大悲の御力の前に頭が下りたのが信心である、否我等の罪と如來の慈悲と力競べをして、遂に負けて仕舞ふたのである、言ひ換ゆれば如來の御慈悲は我等が御慈悲から逃ぐるよりも前き廻りをしたまふのである、されば五道六道といへる惡趣へすてに赴くべき道を願力の不思議として之をふさぎたまふなり、横截五惡趣、惡趣自然閉といふが實に是である、本願力にあひぬればむなくすくひとぞなきといふも是である。

○此の如き本願他力に遇ふによりて我等は救濟せられねばならぬことになるのである、自然之所率である、其本願力の徹

る、しかるに今其眞實の友人が我に向て言ふには、我は汝の心を知りぬいて居る、見透して居る、不實も徹鑿して居る、されど少しも汝を斥くるにあらず、汝を惡しく思ふにあらず、否我が友人として汝を憐む所以のものは、汝が其性質、其物を知ればなり、君の不實は我の汝を捨つるに忍びざる所以なりと言はゞ、いかなる不實なる我も一點横着の心を止むへからず、さればとて一點も氣のすまぬといふ遠慮心はなくなるのである、無疑無慮といふは是である、邪見憍慢を廻へして御慈悲に入るといふは是である。

○『涅槃經』の文に如來爲一切、常作慈父母、當知諸衆生、皆是如來子、世尊大慈悲、爲衆修苦行、如人著鬼魅、狂亂多所爲、と仰せられ文が亦同様に味ふことが出来る。如人著鬼魅、狂亂多所爲といふは、如來が我等が煩惱の鬼魅に著せられて狂亂所爲多き有様を見透されたることである。見透されたといへば、何んとやらん、氣持悪しき様なれども、左様ではない、寧ろ同情の言である、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ、又いさゝか所勞のこともあれば、死なんざるやらんと心細く、ちぼゆることも煩惱の所爲なりと同情して御察し下さる言である、彼の性質である、煩惱の所爲である、狂

底したるとき即眞心徹到したるときが歸命の一念である、これが攝取不捨さるゝ時である、是が他力である、阿彌陀である、行巻に十方群生海この行信に歸命したてまつれば攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀と名づけたてまつる、是を他力と曰ふと。

○されば他力本願の我等を救濟したまふ御力の最も難有き點は、我等が罪惡の底まで見透したまひて慈悲の御手を下したまふ點にあるのである、親鸞聖人が何時も如意の釋をもて此如來の御慈悲を示したまふのである、如意と言ふは二種あり、一には衆生の意の如し、彼の心念に隨て皆應に之を度すべしとあるが、我等が罪惡の心底まで見透したまふのである、我等が不實の底まで御存知なのである。

○たとへば我等が眞實なる友に對して不實なる心をもてるとき、之を匿しつゝある間は如何に友人が眞實にして呉れても氣がすまぬ、又眞實を受けながら、心私かに不實の心を抱きつゝあるなれば、先方を氣のよき人なりと馬鹿にして居る事になるのである、一元的に考へて人生を直に御慈悲なりと押しつけても氣がすまぬのも、又結局自然主義に陥りて、結局罪惡の儘が御慈悲なりといふ横着に陥るのも此道理である。

氣のせいである、業報のせいである、とみそなはずのである。

○しかし、たゞみそなはずだけでも致方がない、同情して下さるだけでは空しく見殘されねばならぬ、しかるに如意の釋にも、二には彌陀の御意の如し、五眼圓かに照し、六通自在にして、機の度すべきを觀そなはして、一念の中に、前なく、後なく、身心等しく赴き、三輪開悟して各益したまふこと同じからざるなりとある、ささにも言へることく我等が不實を飽までたすけずばおかぬといふ御眞實の今日阿彌陀の自在神力である、『涅槃經』の文を如來の御苦勞の御姿と見ることが出来る、世尊大慈悲衆の爲に苦行を修したまふことはたとひ身を苦毒の中に終るとも我行精進にして忍びて遂に悔すと恰も狂亂所爲多き御有様である、是即ち五劫永劫の御苦勞十劫已來の御待兼のやるせなき御慈悲である、此御慈悲の爲に煩惱狂亂の我等も、かくも地獄必定の我等をかくまで見捨てたまはぬ御眞實にたすけられまぬらせて、地獄におちたりともさらば後悔すべからず候と大満足の心にして下されたのが救濟である、攝取不捨である、眞心徹到である、往生決定である、功德の寶海みち／＼と煩惱の濁水へたてなしてある。是こそ

義なきを義とすである、自然法爾である、煩惱具足と信知して、本願力に乗ずれば、すなはち機身すてはて、法性常樂證せしむである。

○かくて生死海中の生活が光明海中の生活となるのである、大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば至徳の風靜かに、衆禍の波轉す、即無明の關を破し、速に無量光明土に到て、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也と、是れ實に叔濟せられたる人生の風光である。

お婆様には御不自由の身にもかばらず、毎度求道會へ御参詣下さいまして法話の要點を御きかせ下され、誠に難有く存じます。ことに今度の御文にございまして「こんなものを御助け下さるおみだ様であると言ふ人云々」こればかりに多くの人の、大變まちがふところで御座います。その通りにいたしますと、自分はいくら悪くても阿彌陀様が助けて下さるとなりまして、悪いのが天下晴れて通るわけになります。

さうして無い。善い事をしようと思つても心のまゝにできず、悪い心を起すまい、悪いことはすまいと何程思つても、其の悪い事がつまない、誠に在てみやう無い此奴を、可哀想で捨て、なげけと何とひ難有い御慈悲であらうと、遣る瀧無い如來の御心を頂かねばならぬので御座います。まことに「心得違ひをせぬやうに、致さればなりませんね。

そこで此度は御婆様へ誠に難有い、嬉しい御話を申上ります。私が當地へ参りました最初から、大變御世話ください、殊に此の間も申上りました外善まで恵んでくださった友人原田勝次郎さんと申す御方は、まことになさけの深い御方ですが、佛様も神様もないものだといふ程の御方で、それが去る十一月一日夜初めて私が他力の木願のおゆはれを、手近い例でお話いたしました

ころ、大變驚かされて、これは實によく事のわかつた教である、どうか木を貸してくれと申されて、其の後熱心に御讀みになりました。さうしますと、初めは自分は悪い事ばかり、立派な美しい心を持てる人間だと思つて居たが、大變なる違ひだ、吾々の毎日することなすこと、一つとして罪惡でないものが無い。而してその罪惡の者がよく「考へてみると大變なお慈悲を蒙つて居る、まことにありがたいと喜び出されたので、私ばうれしくてなりませぬから、尙ほ「すゝめて居りました。而して佛の難有いところが分らんと申して居られたから、去る二十七日夜(土曜日)具島さん(最初御話した時の處で原田さんにあひまして御話いたしました。自分が悪い奴だとほんとうに気がつき、そして其の悪い奴がこれほどの御恩を受けて居るといふ事をあなたがお自覺しながら、其の恵みを與へられた御主人の御佛を信じられぬと云ふ事がありますまいと申上げました。

原田さんが首をたれて久らく「考込んで居られたが、忽ちからだか机の上へ投げ出して身をふるはして泣き出された。私は思はず飛立つてわきに走り、あゝ有難い御慈悲を頂いてくださったか、有難い、嬉しい、苦しいでせう、御察し致します」と私ば共に泣きました。原田さんは一音も出されず泣きつづけられたのみであります。やがて漸く起き上りになり、すゝりなきしながら申されました。「ア有難い、今迄自分の力で頂くものばかり思ひあせて居た、申すに無いたし、又泣かる。私も手をしつかと取て、うれしく」と共に嬉なさいました。原田君は目鏡をかけて居る、爲め、涙で見えなくなつたとわづらうては泣き、泣き立てはわづらうて居られる。先き程から私共二人のさまを見て居られた具島君は、ぼんやりしてどうも不思議ぢや」と首をひれつて考へて居られる。初めてお話してから五十七日目で御座います。誠に不思議で御座います。其の晩は私ばうれしさと尊さと有難さ交々胸にせまつて眠れませんでした。後ちにくまますと、原田君も其の夜は少しも寝られず、有難さとうれしさにくり反し泣き明かされたと申されました。云々

御老母様御母上様へ

在米 寺島恕より

講

義

### 「教行信證」信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

### 第十一席

結 釋(大心海釋)

信知至心信樂欲生、其言雖異其意惟一、何以故、三心已疑蓋無雜、故眞實一心是名金剛眞心。金剛眞心是名眞實信心。眞實信心必具名號、名號必不具願力信心也。是故論主建言「我一心、又言如彼名義欲如實修行相應故。凡按大信海者、不簡貴賤縉素、不謂男女老少、不問造罪多少、不論修行久近、非行非善、非頓非漸、非定非散、非正觀非邪觀、非有念非無念、非尋常非臨終、非多念非一念、唯是

不可思議不可說不可稱信樂也。喻如阿伽陀藥能滅一切毒。如來誓願藥能滅智愚毒也。

開會以來、長々お話する三信釋の、彌々最後の御文であります。直に御文に就てお話するに

「信に知ぬ。至心信樂欲生、其の言は異なりと雖、其の意惟れ一なり。」

先日來種々なる入信の實例によりてお話する如く、至心のまことは、我々には一つも有ること無い。我々の方よりまことと思ひ、こしらへて居る佛ならば、佛迄が我々のこしらへ物に過ぎぬのであります。處が今我々、其のまこと無き様を哀はれみて、飽く迄其の者にまことと向つて下さるが佛の至心のまことである。汝のまことに出來ぬが哀はれて、夫れて其の者が見捨てられぬとあるまこと、如來廻向のまことなのであります。信樂も又我々自分の方で信じ喜ぶ事は出來ぬ。其の仕て見やう無き淺間しき私の心なれども、大悲の佛は其の信じられぬ處が彌々哀はれと、此の者を飽く迄信じ、飽く迄善くして下さる。其の飽く迄信じ、善く仕て下さる佛のお心を頂けば、我々の心中に初めてお見捨てなきお慈悲の有難やと、信樂の一念が開發し來るのである。欲生も我々此方より淨土に参り度いなごいふ心は無けれども、佛より「我が國に生れんと欲へ」と遣る瀧無き御呼びかけにより、初めて我々の心中に、有難いと思召しが頂かれるとなるのであります。至心信樂欲生の三心、言葉こそは斯く夫れ、異つてあるが、意は此の仕て見やう無き御同やうを救はうとある御眞

實一つにて、頂く此方の手前よりいふ時は、三信何れを頂いても廣大な御親切に疑ひ晴れ、有難いと頂く一つである。至心のまことを頂いても、信樂の慈悲を頂いても、乃至欲生の呼び聲を聞いても、三心何れを頂いても、廣大な御眞實に多生曠劫の疑ひの闇み晴れ、有難いと頂かせて貰ふ一つとなるのであります。て「至心信樂欲生其の言は異なりと雖、其の意は惟れ一なり。」

『何を以ての故に。三心已に疑蓋難ること無し。故に眞實の一心是を金剛の眞心と名く。金剛の眞心是を眞實の信心と名く。』

上來席を重ねてお話する如く、至心信樂欲生の三心共に、飽く迄慈悲ばかり、恵みばかりの、一點疑ひの難らざる清淨眞實の信心である。故にひとたび此の廣大の御心に接すれば、如何なる疑ひ深き者も其の疑ひの根本を取られ、斯程迄の遣る瀬無き御まことに會へば、如何に不まことの者も、其の不まことの根底を断れて、佛のまことに溶かされて仕舞ふ。恰も酸き柚子の液の、砂糖に混ずれば忽ち一味の甘さとなり、又心迄眞黒の炭團が、一點火が着くなり、忽ち中迄火となる如く、廣大の佛心に接するなり、何人も唯有難やの喜びばかりして、一點疑蓋の心の難るといふことは無い。故に三心何れを頂いても、斯く頂きた味ひは、一念疑蓋難る事無き眞實の一心である。而して此の「眞實の一心是を金剛の眞心と名く。」——金剛の、火にも焼かれず水にも溺れぬ眞實の心とは、即ち此の一心が金剛の眞心である。「金剛の眞心是を眞實の信心と名く。」——而して此の金剛の眞心、之れ即ち眞宗で

かりて稱ふる念佛では、未だ本當に願力の信心が頂けたとは言へぬのである。故に「名號には必ずしも願力の信心を具せざるなり。」——されば南無阿彌陀佛の廣大の恵みは、口に念佛を稱へさせて貰ふことが主にあらず、肝要は唯此の願力の信心一つを頂かせて貰はねばならぬ事でありませぬ。勿論今言ふ如く、既に『和讃』にも

信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり。

と仰せられ、眞實の信仰には必ず自然に念佛が具はるのであります。其の稱ふる念佛は、我々が聲に出して南無阿彌陀佛々々と、口に稱ふる念佛であるか。又は第十七願の念佛——即ち佛より我々に對して、南無阿彌陀佛と名乗りを揚げて下された、名乗りの念佛——即ち我々が念佛の謂はれを聞き開いて、南無阿彌陀佛々々と、聲に喜びの念佛が現はれる迄、夫れ迄我々に言ひ聞かせて下された所謂其名號の名號であるかと、之れにつき古來色々言ふ人があるのてあるけれども、稱へる迄とあと、念佛に二つある可き譯は無い。初めの席で詳しく申した如く、親の手織り着物の喩て言ふならば、着る可き着物と着たあとの着物と、着物に二通りある可き筈は無いのである。唯今ば同じ着物を、身に親しく着てから言ふ迄に過ぎのてあります。處が親が此の仕て見やう無き亂暴者の爲めに、態々此の一枚の手織りをと、御成就下された親心の塊りの南無阿彌陀佛の着物であつて見れば、眞實の信心の親心が頂かれた一念には「有難や」と其の親の着物を着、念佛を稱へるに決つて居るのである。否な着、稱へずには居られ無くなるのである。處が今言ふ如く着物は着ながら

言ふ處の如來廻向のまことの信心とは之である。とてあります。

次に

二

『眞實の信心には必ず名號を具す。名號には必ずしも願力の信心を具せざるなり。』

昔より能く言はれる名高き御言葉であります。偕て斯く廣大の如來眞實の塊りはと言へば、即ち一南無阿彌陀佛の名號の外に無い。故に此の廣大の眞實の届いて下された一念には彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつ心のまことと、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

と、其一念には必ず念佛申さんと思ひ立つ心が起る。故に「眞實の信心には必ず名號を具す。」——信心頂いた者が念佛の出ぬといふとは無い。必ず南無阿彌陀佛々々と念佛は眞實の信心に附きものなのである。猶ほ「眞實の信心には名號を具す」と仰せられ「名號を稱す」と無いは、設ひ名號が口に現はれぬかて、信の一念にはちやんと念佛が具はつてあるのである。故に第二念には必ず南無阿彌陀佛々々と、口に念佛が現はれ來なくてはならぬのが、眞實の味ひであります。處が唯口に南無阿彌陀佛々々と稱するも、唯口に念佛が稱へられる丈けて夫れて眞實の親心が頂けたとは言へぬ。眞實の稱名は、私共の胸中を知り抜かせられ、此の者を飽く迄見捨てぬとの廣大の御親心が知られた處で、初めて思はず口に浮んで下さる念佛であつて見れば、此の親心が頂かれず唯口先きは

も、眞に親の夫れを御成就下された、親の思召しは頂かずに唯徒らに居る者があつたり、又親しく身に纏ひつゝも、「こは親のこしらへて下された着物であるから、着なくてはならぬ」と無理に我が心を押へつけて居る者が有つたりする。て夫れては何程親の下された着物を着、念佛を稱へて居ても何もならぬ。夫れては何程念佛が口に現はれてあつても、願力の信心を具した名號とは言はれぬのである。眞實信心の稱名は、心に親の遣る瀬無き思召しが頂かれた處で、初めて自然に口に現はれて下さる念佛である處で、即ち佛恩報謝の念佛なのであります。て之は『大經』本願の文の上より申しても、「至心信樂して我が國に生れんと欲へ」との、遣る瀬無き親の仰せが頂けた一念には、必ず次ぎの「乃至十念」の念佛は、之に付き添つて來可きなのである。之は眞實信心の上からは、必ず南無阿彌陀佛々々と、上盡一形下至一念の念佛は、是非あらなければならぬのである。去りながら何程一生念佛しても、夫れが肝要の親の親心を頂かず、唯口先きばかりの念佛では、未だ眞實信心を頂いた稱名とは言はれぬのであります。

三

次は

『是の故に論主建に我一心と言まへり。』

さて斯くの如く頂き來れば、如來の廣大なる三心の御誓ひも、彌々極はまる處は夫れ程迄に御見捨て無き御眞實の有難やと、頂く眞實の一心の外に無い。是の故に天親論主は先づ何を措いても「世尊我一心に、盡十方無碍光如來に歸命した

てまつる」と、先づ初めに一心と御示し下された、とである。

こは言ふ迄も無く、此の三信釋は

問ふ。如來の本願は已に至心信樂欲生の誓を發したまへり。何を以ての故に論主「一心と言ふや。

と、先づ此の天親菩薩の一心の言葉で不審を起し、夫れより漸次三信の思召しを説き下されたのである。夫れ故今は彌々其の一心の間を受けて、三信即ち眞實信心の一心である事をお知らせ下さる結びの御文なのであります。

「又彼の名義の如く、實の如く修行し相應せんと欲するが故にと言まへり。」

こは天親菩薩の五念門の中の、讚歎門の御言葉を、『論註』の中の御文よりお挙げ下されたのである。讚歎門とは、即ち南無阿彌陀佛々々と、廣大の佛名を稱ふるは、即ち佛徳を讚歎し奉るのである。今の天親菩薩の「歸命盡十方無碍光如來」の啓白の御言葉も、即ち此の佛名を稱する讚歎の御言葉に外ならぬのであります。處が今言ふ如く、唯徒らに佛名を口にし、文字に表はすばかりで無く、「彼の名義の如く、實の如く」彼の名義の如くとは、彼の南無阿彌陀佛の名に具はる意義の如くである。彼の佛名に具はる意義の如く、眞實佛名の意義に叶ひて、名號を稱へるので無くては何にもならぬ。其の名號に具はる意義とは、即ち蓮如上人の『御文』には再々善導大師の御言葉を御引用下されて

南無と言ふは即ち是れ歸命、亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に必ず往生を得。

と。即ち南無阿彌陀佛の六字の中には、既に斯くの如きの意味が籠りてあるのである。又其の意味を『和讃』で頂くと、

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、阿彌陀と名けたてまつる。

即ち南無と歸命する一念に、其の念佛の衆生を觀をなはし、其の者を攝取して捨て、下さらぬ親様故に、阿彌陀佛とは申し奉るのである。即ち一念南無と遣る瀬無き心をおこつる上は、其の者を光明中に攝取して、飽く迄捨てぬとお心の儘が南無阿彌陀佛の名號なのである。て其の廣大な名號の意義の如く、其の廣大の思召を有難うと頂いて、南無阿彌陀佛々々と稱ふる名號でなくてはいかぬ。又「實の如く修行し相應せんと欲するが故にと言まり」——實の如く修行し相應するといふも、矢張り同じである。彼の名號の意義の如く、如實に頂き、如實に相應して、稱へさせて頂く念佛であるのであります。

四

猶は茲の處の御文は昨年度の講本の處に、一度詳しく出てある御文である。其處には甚だ大切なる御言葉があるのてあります。夫れは次の如くあるのであります。

云何が不如實修行と、名義不相應と爲す。謂く如來は是れ實相身なり、是れ爲物身なりと知らざるなり。甚だ話が細くなるのでありますけれども、全體佛とは如何なる方であるか。即ち今日眞宗といふ、法性法身、方便法身の阿彌陀佛とは、如何なる人であるか、と言ふ眞宗に於ける佛身論を言ひますに、斯く「如來は是れ實相身なり、是れ爲

物身なり」とある。之れは何うかと言ふに、既に申した事なれども、法藏菩薩が廣大なる願を發して阿彌陀佛となり、我々を助けて下さるといふ其の法藏菩薩は抑々如何なる方か、と言ふに能く基督教の人などは、佛教の佛は法藏菩薩なる一個人が段々大きくなり、發達して成つた佛であると言ふ。成る程一應は聞えるやうでありますけれども、其の法藏菩薩が當り前のお方では無い。『唯信鈔文意』の御言葉には

一如よりかたちをあらはして方便法身とまふす。その御すがたに法藏比丘となりたまひて、不可思議の四十八願をおこしあらはしたまふなり。云云。

即ち一如法界の都より、態々姿を現はして廣大なる本願を建て下されたが法藏菩薩である。法藏菩薩は一如法界の佛境界、即ち本覺明了の廣大なる境界より、我々衆生を救はん爲めに、態々姿を現はし下されたる、所謂久遠實成阿彌陀佛にてましますのであります。て今「如來は實相身なり」とお示し下さるは茲の事を御知らせ下されたのである。而して其の廣大なる佛境界より現はれ下されたる譯け合ひは、其の廣大なる佛境界は、色も無く形もましまさぬ境界にて、其處の味ひは我々凡夫には、極樂に參らせて貰はぬことには分らぬ。又夫れが我々に分る位なら、如來のお救ひに預ることは入らぬのである。こは譬へて言へば永劫の澄みたる月影の如く、我々凡夫の思慮に絶えたる、永遠に覺めたる廣大の悟りの境界なのであります。て我々の信ぜさせて貰ふ佛は、此の悟りの境界の佛で無い。こは我々の想像するだに及ばぬ超絶したる廣大の境界なのである。處が其の廣大なる佛境界より、我

々此方の方を御覽下さるのである。其の廣大の酔の醒めたる境界より、我々三毒の酒に酔ひ狂へる様を御覽下され、其の永久に覺めたる境界より、我々眠り伏せれる有様を御覽下さると、あ、如何にもいつ迄も煩惱にほだされ、無明の酒に酔ひ伏して居る奴が可哀相である」と、即ち

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪さほもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界には影現する。即ち廣大なる覺めたる境界より見ると、「如何にも其の酔ひ、眠れる様が可哀相である」と、即ち遣る瀬無き大慈大悲心が現はれ、茲に一如法界の都より、態々法藏菩薩と名乗をあけて廣大なる悲願をお立て下されたが法藏菩薩てましますのである。て親鸞聖人は『和讃』に、法藏菩薩と言ふ代りに、直ぐ阿彌陀佛と仰せられてあるのであります。即ち『大經和讃』に

彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫とときたれど、塵點久遠劫よりも、ひさしき佛とみえたまふ。南無不可思議光佛、饒王佛のみもとにて、十方淨土のなかよりぞ、本願選擇攝取する。

て斯く一如法界の妙境界の有様は、到底我々には分らぬが、其の廣大なる本願を御成就下されたが、十劫正覺の阿彌陀佛にてましますのである。其の一如法性の廣大なる境界に於ける佛が、即ち法性法身。而して夫れより我々迷へる者、惱める者、無量の毒に中てられて居る者を御覽下されて、夫れが可哀相て仕やうが無く、茲に遣る瀬無き大慈大悲が現はれ、法

藏菩薩と姿を示し、廣大なる救ひの本願を御成就下されたが、方便法身のお姿なのであります。而してそは何かといふに、自分さへ悟つてあれば、外の者は何うてもよい、というのでは眞の悟りの人では無い。自分が悟りの境界に在れば在る丈け、彌々迷ひの者が哀はれて仕やうが無いのである。我々にしても自分の苦が取れて見ると、あと振り反り、自分と同じ苦しみに在る人が氣の毒で仕やうが無い。人生に苦の経験して見ると、他の人の苦しんで居るのが、骨髓迄察しがつくのである。て今其の如く、其の廣大なる境界より御覺下されると、十方衆生、如何にも苦しみ惱んで居るのが可哀相である。と察しがつく。て其の廣大なる大悲心より現はれて、法藏菩薩の本願は有らゆる總ての十方衆生、——有學の者も無學の者も、富める者も難儀な者も、總ての者が迷うて居るのが可哀相で仕やうが無い、遂に夫より無上殊勝の大願を發し、彌陀誓ひを起發して、廣く法藏を開き、凡小を哀はれんで選んで功德の寶を施すことを致す。(教卷)

其の總ての者を救ひ遂げずば正覺を取らぬ、といふ若不生者の誓ひの下に、長々御修行の結果、現はれて下された佛が、即ち方便方身の阿彌陀佛のみ姿である。であるから「如來は是れ爲物身也」——物の爲めのお姿であるといふは、茲である。夫れ故我々十劫正覺の阿彌陀佛といふことは、此の私が可哀い爲めだといふ外、言へぬのであります。之は先き程の親の着物の喩へて言へば、親の手織りの着物は何か、即ち私に着る爲めの着物なのである、私といふことを言はずに、着物の意味を言へといふたとて、言へやせぬのである。何故此

の着物は茲の處に襟があり、袖があるのであるか。そは私に頸があり手がある爲めに、其の頸、其の手にさちんと着させる爲めに、一々四十八願が皆な設けさせられてあるのである。て斯く私が可哀いばかりに法性法身より、方便法身のお姿が現はれさせられた。即ち法性法身の盡十方無碍の廣大なる境界より、盡十方無碍の阿彌陀如來のお姿が現はれさせられた、となるのであります。

五

處で以上申すことは、之を佛陀の講釋と思はれたら大變間違ふのである。是れ皆な阿彌陀佛のお慈悲の有様に外ならぬのであります。即ち佛の名號、佛のお姿其の儘が、今言ふ如し丸々私のお姿、名號に外ならぬのである。であるから其の廣大のお心を我々に初めて知らされた時には、「今迄、あだおろそかに思つて居たが、夫れ程迄に佛はこの私の爲めに、御苦勞下されてあつたのであるか」となる。茲は此の間申した姨捨山の話にする時は、即ち親が最後に「汝の爲めに道々木の枝を撓め草を結び、道しるべ仕て置いた故、夫れを辿りて誤らず歸れ」と言はれた一念には、「今迄親が歸る爲めの道しるべと思つて居たに、私が歸る爲めの道しるべであつたのであるか、忝けなや、申譯け無い」となり、茲を『歎異鈔』のお示しには、

彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと。

候。云々。

即ち「私が五逆十惡の悪人であればこそ、その爲め五劫永劫の長の御苦勞をさせしめ奉つたのである」と、分るは斯く廣大の思召して向つて下さる佛の佛たる親心を知らせられるから分るのである。斯く罪業の私の爲めに、五劫永劫の苦勞迄して、飽く迄捨てぬとの廣大の佛にてましませばこそ、此の罪業深重の悪人が、やすくお救ひに預かられるのであります。て其の廣大の佛身である事が知れたのが、即ち「如來は是れ實相身なり、是れ爲物身なり」と分つたのである。處が茲の肝腎のところが頂けて無い者が、即ち不如實修行と名義不相應とてあるとであります。處が近時青年の人などには、能く「佛が分つたら信ずるも、分らぬから信ぜられぬて困る」と言ふ人がある。分つて頂く信心で無く、此の遣る瀬無き親様なる事が頂けた時が、即ち信じたのである。設へは電燈がバツと點火した時には、最早や分るも分らぬも無い。其の如く佛のお姿や形や、道理理窟で分らねども、此の者を見捨て給はぬ御親切の有難やと頂けた一念には、夫等の總てが其儘丸々頂かせて貰へるのである。之が即ち「如來は是れ實相身なり、爲物身なり」と知れたのであります。

六

次には  
「凡そ大信海を按ずれば、貴賤縋素を簡ばず、男女老少を謂はず。……」

親鸞聖人御一代の御教化は、實に此の大信海一つをお知らせ下さる外無いのである。逆如上人は『御文』に宣はく、  
聖人一流の御勸化のをもむきは、信心をもて本とせられ

實に此の大信海釋の御示しが、此の三信釋の結文にあるのが有難いのであります。「凡そ大信海を按ずれば」——實に深いとも、底の知られざる信心の大海である。其の大信海を按ずれば、「貴賤縋素を簡ばず、男女老少を謂はず」——何うも御同やう人間は位て上下貴賤の別があり、僧あれば俗もある。縋素は縋は黒衣の僧侶を謂ひ、素は白衣の俗人のことである。こは印度の昔の風習から出たことなのであります。甚だぶしつけな申分なれども、茲にお集り下さる皆様の間にも、位置階級、教育の有無等、種々様々の別があると思ふのであります。夫れが必しも位置の貴き方であるが故に、著しく喜び下さるといふ譯けても無く、又賤しき故に喜びが薄いといふ譯けても無い。茲に御出下されて、此の御本書の講本を手にし、親しく本文を讀ませて頂くと又格別有難いとお喜び下さる方もあれば、之を引繰り反して見ても私には讀めぬ。讀めぬて彌々有難いと言はれた方もある。斯く平日は教育の有る無し、僧侶と俗人、位置の高下、様々の別があると思つて居るのであるが、彌々此の信心の一段となると、僧も俗も、男も女も、年老いた者も若い者も、——茲にお出下される中に在來の説教を聽聞しなれた老人の方もあれば、又新しき考えて求めらるる青年の人もある。又禪てやられた人もあれば、中には基督教の方もお出でになる。斯く老人も青年も、又學問の有る人も無い人もお出でになるのであるが、夫れが學問があるから必ずしも貴い無く、又一文不通であるから、慈悲が分らぬといふので無い。さればとて又學問が無つたら

頂けやうに、有るから頂けぬと、學問の有るのが何の妨げにもならぬ。『和讃』には、

聖道門のひとはみな、  
自力の心をむねとして、  
他力不思議にいりぬれば、  
義なきを義とすと信知せり。  
聖道門の如何に學問の有る人でも、彌々他力不思議を頂く時は、「義なきを義とす」と頂かれる外無いのである。又法然聖人門下の隨蓮坊の如く、初めより何も分らず、唯南無阿彌陀佛々々と頂くも、結構なのであります。

七

又

『造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず。……』  
之は『歎異鈔』の中に詳しくお知らせ下されてある。即ち十三章に、

(上略)うみかにはあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりにのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畑をつくりてするひとも、たゞおなじことなり。さるべき業縁のよほせば、いかなるふるまいもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうにもひ、あるひは道場にはりぶみをして、なん／＼のことしたらんものをば、道場にいるべからずなどいふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚假をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のよほすゆへなり。さればよきこともあしきことも業報にさしつかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこ

念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云云。

とあるは、茲なのであります。我々が南無阿彌陀佛々々と念佛稱へるは、即ち行をするのであるといふと、即ち念佛を一種の行である、善であると思ふ人が有るかも知れぬ。去りながら念佛は如来廻向の大善大功徳であつて、即ち如来の善であり、行である、我々の行、善とはならぬのである。然らば全く我々の行では無きか、善では無きかと言ふに、今我々が南無阿彌陀佛々々と念佛稱へさせて貰ふは、即ち親が私のため下された金、着物を我々が有難く頂いて、我々が如来の大善大功徳の着物、金を着、用ゐさせて貰ふものである。故に我々が着、用ゐさせて貰ふ金、着物なれども、其の金、着物は我々自分の金、着物でなく、親より着させ、用ゐさせて下さる金着物である。故に南無阿彌陀佛の一念佛を、他力大行の催促とお知らせ下さるは、これなのであります。

八

又

『頓に非ず、漸に非ず。……』

「信心は圓頓の理法より、ばつと一邊に頓悟するものである。」「いや慈悲は然らざるやなく、何時の間にかそろ／＼と漸次に頂けるものである」など、そんな一邊に頂くとかそろ／＼頂くとか、いふ事が信心にあるもので無い。佛の遺

そ、他力にてさふらへ。云々。

實に斯くの如く如来の遣る瀬無き大慈の前には、造罪の多少を論じ無い。法然聖人が信空上人の室で御法話の時には、縁の下で聞いて居た鼻惡殺人の耳四郎が、廣大のお慈悲に感じ、共に喜びに入つたのである。又上は關白兼實を初め、熊谷直實の類や、平重衡の輩に至る迄、敵も味方も公家も町人も、乃至男も女も小供に至る迄も、南無阿彌陀佛々々と、法然聖人の御化導の下に、遣る瀬無きお慈悲一つを喜ばせて貰ふたのである。さればと言つて何も悪くならなくてはいかぬと考えて、悪くも無い身を態々傷つけるにも及ばぬ。能く中には一層のこと惡事でも犯したらお慈悲が頂けやうかと、苦しみて言はれる人がある。自分で力んで悪い事仕たとして、夫れて吾が身の惡しさに頭が下るといふもので無い。そういふ心が即ち自分で一つ角善い事が出来るといふ根性を離れぬのである。又今迄何れ丈け修行せられた智者聖者と雖、此のお慈悲の不可思議を頂かれる時には、總て今迄の自力作善を廻へして。本願の御まこと一つを頂くのである。佛の遣る瀬無き御眞實を頂かせて貰うた上からは、今迄自力修行に係はつて、長い間お慈悲を頂かなんだ事の、長ければ長き丈け彌々申譯けが無い。故に修行の長き者は、長きを以て法に入り、短きは短きて彌々お見捨て無きお慈悲を喜ばせて貰ふのである。又

『行に非ず、善に非ず……』

茲になるともう何とも言葉が絶えて言ひやうが無い。『歎異鈔』に

る瀬無き、お見捨て無き廣大のお慈悲一つが届いて下された處が信心なれば、斯ることが信心の要件とならぬのである。いや私は頂いた一念に覺えが無い故、頂けて無いかも知れませぬと、そんなこと言つて居るから、肝腎のお慈悲に腹ふくらせて貰ふことを忘れ、信心が横の方に飛んで行つて仕舞ふのである。故にお慈悲は頓に一邊に悟るにも非ず、又漸々に修養して信仰の域に到るのにも無い。飽く迄お見捨て無き廣大の思召、一つが届き、充分に其の御親切一つに腹ふくらせて貰ふか否やが信心の問題なのであります。又

『定に非ず、散に非ず。……』

定は即ち佛法専門で、我々が禪定を修し、靜かに考察して行かうとするのが定である。又散は之に反し我々が兎角の念慮を用ゐるで無く、飽く迄實行し活動で到らうとするが、散である。即ち今日の言葉で言へば、定は冥想的に安心を求め、散は實行で其の境界に到らうとするが散であります。處が今遣る瀬無き他力の信心は、其の冥想的の定でも無ければ、實行的の散でも無い。若し我々が冥想的に十界一如の理を觀じ、了々分明に佛境界の有様を心中に明らかにするが信心だとする時は、到底我々には出来やせぬのである。如何に況や我々が限り無き理想を追うて一々實行して行かうと言つたとて、到底夫れが我々には出来るもので無い。處が兎角我々には此の二つの病癩あつて、即ち青年の人に於ける時は、常に慈悲の面影を心中に思ひ浮べ、飽く迄冥想思索によりて行くのであると、何時迄も冥想空想より離れる事出来ぬ人は、即ち定善の人である。又一方は正義、道徳、理想といふやうのこ

とを喧しく言ふ人にて、即ち「人間は何處迄も其の敵を愛しなればならぬ」、「身を捨て、も人の爲め盡さなければならぬ」と、常に理想の實行々と努めて居る人は、散善の人である。處が今他力の味ひは、此の定善の心持ちでも無ければ、又散善の心持ちでも無い。『救徳文』の言葉には、定水をこらすといへども識浪しきりにうごき、心月を觀ずといへども妄雲なほほふ。云々。

『往生要集』の御言葉には又

顯密の教法其の文一に非ず、事理の業因其の行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲さず。予が如き頑魯の者豈敢

てせんや。處が其の如く定善の冥想も出來ぬ、又散善の六度萬行の實行も出來ず、理想的行爲も忽ち行き詰つて仕舞ふ、其の如き淺間しき、邪推深き、人に心の隔たる、其の仕て見やう無き煩惱強盛の心中を御覽下されて、夫れが如何にも可哀相捨て置けぬとの其の遣る瀬無き大悲の御親切を頂いた時が信心であるから、即ち「定に非ず、散に非ず」であります。

九

また

『正觀に非ず、邪觀に非ず。……』

正觀は今の定善の觀察である。正しく佛のお姿を、常に目に見る如く觀察することである。而して此の反對が邪觀となる

のであります。處が又我々の頂く信心は、そんな此方より佛のお姿を正觀することや邪觀することと無い。親鸞聖人は天親菩薩の

佛の本願力を觀たてまつるに、遇ふて空しく過る者無し。能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

の文の觀の字を、此の觀は「みそなはず」であるとお讀み下された。即ち佛より我々の仕て見やう無き心中を、哀はれと觀そなはし下さる一念に、あゝ有難いと其の遣る瀬無き大悲の御まことが頂けたのが信心なれば、信心即ち佛の正觀なのである。佛より正しく知召し下されるのである。我々の此方よりこしらへる正觀や邪觀では無いのであります。茲は又『和讃』に

本願力にあひぬれば、

空しくする人ぞなき、

功德の寶海みち／＼て、

煩惱の濁水へだてなし。

次は又

『有念に非ず、無念に非ず。……』

これは佛敎の觀法上に、種々なる色相の形を觀る法や、又觀無いやり方など、色々の法がある。即ち聖道門で言ふ時は、有念は三十二相八十隨形好の形ある佛身を觀るやり方で、又無念は夫等の形を離れて、無念無想を觀するのである。處が今我々のほうは、そんな有形や無形に佛のお姿を見る法では無く、佛の方より私を知召して、飽く迄見捨て給はぬ廣大なる慈悲の塊りの名號、念佛を頂く一つ故、即ち「有念に非ず、無念に非ず」である。又

『尋常に非ず、臨終に非ず。……』

尋常は即ち平常の時であります。即ち平常の時ちやんと決めて置かぬと、臨終の時に及んでは聞かれぬといふ慈悲でも無ければ、又彌々臨終と取り詰めると、誰でも必ず頂けるといふ信心でも無い。即ち平常で有らうと、臨終で有らうと、遣る瀬無き廣大の御哀はれみに疑ひ晴れた立所が信心で、夫れが平常で有らうと、臨終で有らうと夫れを問ふを要し無いのである。故に此の御慈悲の上からは、臨終に及んで佛の來迎を期し、正念に住しなくてはならぬと、力むことも無ければ、又平日の時あぢや斯ぢやと準備して頂く信心でも無い。設ひ平常で有らうと臨終であらうと、乃至病中で有らうと、此の穢き胸中にも見捨て無き廣大のお慈悲一つを頂くことが、肝腎なのであります。

又次ぎには、

『多念に非ず、一念に非ず。……』

これは此の一念、多念の争ひが、親鸞聖人御在世の時から大變やかましかつたのである。御存知の如く多念義といふは、常に南無彌陀佛々々と始終念佛稱へ無くてはならぬと言ふのである。之では何時迄経ても安心といふことが無く、何時迄も稱へ詰めて居なければならぬやうになるのである。又一念義といふは、聞く一念にハツとお慈悲に氣がつくと、「もう之れでよい、之で信心が頂けた」となる、之であります。て多念義の方でゆくと、所謂修養の誤りに墮ちて、常に南無阿彌陀佛々々と念佛を口にして、不斷に修養して行く意味となり、遂に臨終正念迄夫れでゆくのが多念義である。又一念

義は、頂く一念に「もう、事済みになつて仕舞つた、もう、頂いて仕舞つた」といふ邪見に陥る恐れがある。處が此の一念多念の問題は、信仰上昔も今も變り無く、常に注意すべき問題なのであります。て多念義の方は、之が人生に表はるゝ上より言ふ時は、人生の事々物々を、「あれも慈悲の表はれてある、之も慈悲の催してある」と、萬事萬端修養風に喜んでゆく信仰となり易い。又一念義の方は、所謂今日でいふ實際的は實際的なるも、今迄久しく人生の苦惱に泣きた者が、一念廣大なる慈悲のお知らせに預るなり、自分の喜びにお慈悲の方は忘れて仕舞ひ、「自分はもう之でよい」となる。甚しきは、其の一念の感激の有る無して信仰に何切りをつけ、遂に之から祕事法門なども出て來るやうの事になるのである。て此の一念、多念の味ひは非常に考ふ可きことなのであります。處が當流の親鸞聖人のお示し下さる所は何うかといふに、蓮如上人は『御文』に宣はく、

一念をもては往生治定の時刻とさだめて、そのときの命の

ぶれば自然と多念にをよぶ道理なり。云々。

今迄人生の憂苦に行き惱んで居た者が、初めて廣大な遣る瀬無き慈悲を知らされた時は、「やれ有難や」と一念の信樂を開發する。その一念開發の時を以て、即ち「往生治定の時刻と定めて、その時の命のぶれば自然と多念にをよぶ道理なり。」即ち初めて有難き親の思召してあると、親のお慈悲の胸に貫へた一念が即ち信樂開發の一念なのである。て其の一念がお慈悲の頂けた一念に違はぬが、其の一念の上からは、いつ思ひ出さして貰ふても、必しもいつも初一念の喜びが常

にある譯けてはなけれども、いつ何時自分の胸中を眺めても、遣る瀬無きお救ひに一點の疑ひが無くならず、ひと度此の一念に夜明けさせて貰ふた上からは、設ひ時には貪愛瞋憎の雲霧に蔽はれ、時には暴風驟雨の荒立つ事あるも、其の下から、いつも面變りなく南無阿彌陀佛々々と、腹一杯喜ばせて頂けるが、初め一念に頂いた信心なるも、其の一念が自然と多念に及んで下さる味ひなのであります。て此の遣る瀬無きお慈悲の事は、之を一念ときめても不可なれば、多念と言つても可かぬのである。何故なれば、大悲の親様が廣大の御まことを以て私を待つて、待ち兼ねて下され、

至心信樂欲生と、  
十方諸有をすゝめてぞ、  
不思議の誓願あらはして、  
本願選擇攝取する。  
斯く待ち詭びて下さる廣大のお心を、初めて聞かせて貰ふた一念に、

一向專修のひとにおいては、廻心といふことたゞひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとちもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまゐらすること、廻心とはまうしさふらへ。云々。(歎異鈔)

と、此私の根性を飽く迄見捨てず、飽く迄、不まことの私に、まことを以て向ひ、呼びかけて下さる廣大のお心を聞かせて貰うた時に、やれ有難やと其の廣大のお慈悲が私の心中に届して下された有様が、  
夫れ以れば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發

お慈悲により、臨終一念の夕に大般涅槃を證させて頂く、之れが即ち大信海の味ひであります。て茲になると、最早や言ふ可き言葉が無く、即ち不可思議不可稱不可説の大信海である。有念の無念の、一念の多念のと言つて居られる段では無いのであります。

さて斯くの如き廣大の信心海故次には  
『唯是れ不可思議不可稱不可説の信樂なり。』  
實に口にも言葉にも何とも言つて見やうなき絶大なる御哀みである。『和讃』には

いつゝの不思議をとくなかに、  
佛法不思議にしくぞなき、  
佛法不思議といふことは、  
彌陀の弘誓に名けたり。  
茲になると我々は、最早や不思議のお慈悲を、唯不思議と信ずるの外は無い。『未燈鈔』には又

誓願をはなれたる名號も候はず、  
名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、又名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき。さゝわけしりわくるなど、わづらはしくはおぼせられさふらふやらん、これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかくの御はからひあるべからず候。云云。

實に此の者の爲めに着せやうと、態々一枚の手織りの着物をこしらへて下された親の親心も不思議なれば、下さる着物も又不思議である。親心の佛の誓願も不思議なれば、下さる名號の着物も不思議である。てまゝ、佛智不思議の御哀は

起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。(信卷)

とお知らせ下さる信樂開發の極促なのである。然るに是れ程廣大の如來廻向のおまことに預りながら、之を頂くに「イヤ一念に一寸頂いて仕舞うのであるの、多念にぢり、頂くのであるの」など、いふて居られべき事ぢや無い。大悲のお手許の御苦勞の方はと言うに、親様の方は之を知らせる爲めに五劫永劫の苦勞迄して、遣る瀬無き心を運んで下され、大聖釋尊が八千度び娑婆往來し下されたも、畢竟此の私を助けるとの遣る瀬無き大悲の御苦勞に外ならぬのである。て斯く是れ程迄の廣大なる選擇願心の御念力で以て、向うて下さる遣る瀬無きお恵みなれば、斯く御同やう一堂に集つて、喜ばせて貰ふ事の出来るのは、或は先世に於て同じ席にて共に佛縁に遇はせて貰うた間柄で有るかも知れぬ。又或は同じ禍で共に苦しんだのかも知れぬが、兎に角生々世々過去遠々の昔より、色々の事てさ迷ひ來つた御同やうである。然るに其の者を飽く迄捨てぬとの大悲より、過去遠々の昔より一切の佛菩薩が、其の者に有りとある縁手が、りをお附さげ下れ、とうど今世に於て釋迦世尊の仰せのまゝに、彌陀のお慈悲を聞きえた一念、此の一念に遂に遣る瀬無き佛の思召がまる、届いて下されて、之が即ち信である。て斯く大聖矜哀の善巧のお催うしにより、斯く其の一念に選擇本願の廣大なる思召しを頂くこと、不思議なる哉南無阿彌陀佛々々と、所謂深き深き罪業深重の身なる事が分り、而も其の身が深き、廣大の

れみと、初めて其の遣る瀬無き思召しに頭が下り、其の廣大の御親切を親しく身に纏はせて頂くこと、  
五濁惡世の有情の、  
選擇本願信すれば、  
不可稱不可説不可思議の、  
功德は行者の身にみたり。

其のお慈悲を頂いた味ひは、彌々以て言葉も心も絶え果てた不思議である。人生に於ける奇蹟の宗教は、唯世間一應の不思議を言ふ丈けの事ならば、何も左程驚いて目を見張るにも當らぬが、蓮如上人は法敬坊が六字の名號が焼けて六體の佛と御なり候を、如何にも不思議であると申したに對し、  
それは不思議にてもなきなり。佛の佛に御なり候は不思議にてもなく候。惡凡夫の彌陀をたのむ一念に、佛になることを不思議よと、仰せられ候なり。(御一代記問書)

南無阿彌陀佛の六字の名號が焼けて、六體の佛となり給ふたは佛が佛になり給ふたの故、一向に不思議でも無い。が此の罪深き惡凡の、此の仕て見やう無さを斯程迄に捨てぬとある廣大の思召しが實に不思議である。故に茲になると、「能くも、斯る者が可哀想であるとの、遣る瀬無きお慈悲なりしか」と、言葉も心も絶え果て、南無阿彌陀佛々々と、思ひ出す度び毎に喜ばせて頂くの外は無い。法然聖人の御歌には  
阿彌陀佛といふよりほかは津の國の  
難波のことあしかりぬべし。

又『和讃』には  
彌陀大悲の誓願を、  
ふかく信ぜんひとはみな、  
ねてもさめてもへだてなく、  
南無阿彌陀佛をとまふべし。

反すくも不思議廣大の御哀れみであります。

そこで次には

『喩へば阿伽陀薬の、能く一切の毒を滅するが如し。如來誓願の薬は、能く智慧の毒を滅するなり。』

阿伽陀薬といふ薬は、如何なる毒でも一切の毒を消し滅す薬である。今佛の此廣大不可思議のお慈悲は、如何なる毒、罪でも之を消し滅して下さること、丁度阿伽陀薬の如くである。であります。之はよく氣を就く可きことは、此の佛のお恵みは、往々人の言ふ如く、「罪ありてもよい、障りありてもよい」と、罪や障りを其の儘に置きながら、上から臭い物を蓋をする如く、其の者を救ひ取つて下さると言ふお慈悲ではない。罪有れば罪を滅し、毒あれば毒を滅し、借金あれば借金を消失させて救つてやらうとあるお慈悲である。て御同やう凡夫の手前より言ふ時は、如何も「不斷煩惱得涅槃」とお示し下され、此方より煩惱を断たう、妄念を拂はうと骨折るては無けれども、之を佛よりお知らせ下さる時は、信の一念に「横超斷四流」とある。又『和讃』の御示しには

罪障功德の體となる、こほりとみづのごとくにて、

こほりおほきさみづおほし、さほりおほきさに徳おほし。

斯く、毒、罪の有れば有る丈けを悉く大悲の心で解き滅し、救ふとある廣大のお慈悲なのであります。而して其の我々の毒の中にも色々の種類がある。「自分はなか／＼分つて居る」「自分ばかりは善いこと仕て居る」と思ふは是れ智慧の毒である。必ずしも難毒難善の、にがいものばかりが毒と限ら無

く御同やう今迄自分の僅かばかりの小善を頼み、善いの悪いのと言つて居るのであるが、一朝夜が明けて見ると、今迄光りがあると思つて居た電氣燈も、唯一面の明るみである如く、善いも悪いも唯此のお慈悲一つで助けられるので、此のお慈悲の前には、我々の善いも必ずしも善いで無く、又悪いが必ずしも悪いで無い。『救異鈔』の御教化には、

聖人のおほせには善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆへば如來の御こゝろによしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、よさをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど……

我々の善いと思つて居るも、畢竟自分の計らひに過ぎぬ。佛の眞に善しと思召す通りに、何が自分に出來てるものか。又悪いと言ふも、其の悪い心のどん底迄知り抜いて其の者を捨てぬとあるお慈悲に遇はせて貰うたのであるから、其の悪いが此のお慈悲の爲に浮んで仕舞ふ。斯くして善いも悪いも皆な浮いて仕舞つて、我々の是非善惡佛のお慈悲の前には何等も力もなさなくなる。又聖徳太子十七憲法の第一章には

忿を絶ち慚を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆な心有り、心各執るところ有り。彼れ是なるときは我非なり。我是なるときは彼れ非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、誰能く定む可けんや。云々。

我々人の事を善し悪しと言ふて居るのであるけれども、自分のことを聖と思つて居るから、人が愚と見えるやうになり、

い。中には「自分は自分分つて來た」といふ甘い方の毒もある。斯く智も愚も共に毒である。故に又自分の愚を以て誇りとしてもならぬ。人間は總てすることなすこと、富貴も毒なれば貧窮も毒、學問も毒なれば、榮達も毒である。斯く毒の固まりて出來上つた人間、八萬四千の毒で充ち満ちたる我々である。である故に「其の毒で閉ぢられて居る汝が可哀相である、其の心の淺間しいのが如何にも哀はれて見て居られぬ」と、其の毒を轉じて薬として下さるお慈悲である。假へば氷を解して水となす如く、悉く我々の智慧の毒をば照らして、大慈大悲の水と變へて下さるが、遣る瀬無き如來大悲の信樂なのであります。て『和讃』の御化導には、

彌陀智願の廣海に、

凡夫善惡の心水も、

歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。

茲は皆様に是非よく氣を付けて聞いて頂き度いのであります。て此の廣大の信仰の上からは、實際上今迄惡人、人殺しと思はれて居た人も、其の振り上る手の下から、哀はれと眺めて、下さるお慈悲の爲めに、再び手を下すことが出來ぬやうになつて仕舞ふのである。又善い方と言へば、私共平素之なら大抵に親孝行が出來てる／＼と、自分が一つ角親孝行仕て居ることに目をつけ、自分は善い事を知つて居る／＼と言つて居るのであるけれども、第一其の知つたは誰人のお陰であるか。又其の自分の居る所は、誰の下された物であるかとなるに、自分のものとは何一つ無きに、一つばし自分が偉らさうに思つて居たは、大なる間違ひであつたと謝り果てるやうになる。こは智慧の毒を滅して下さるものである。て斯

人を是とするから自分が非と見えるやうになる。畢竟共に是れ五分々々の凡夫のみ。今の『救異鈔』の續きには

……煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせさふらひしか。

一朝ぐわらりと夜が明けて見ると、全面唯もう遣る瀬無き南無阿彌陀佛のお光りばかり。斯くして今迄の電氣も瓦斯も皆な其の光力を失ひ、我が身は何うなるかといふに、『和讃』結末の所のお示しには

是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。まことに廣大なるお恵みであります。

一三

猶ほ今の『和讃』結末のお示しには、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり。

斯く頂き來ると、私など鳴訝がましくも親鸞聖人の『御本書』などを講本に供へ、彼是れ善し惡の文字知り顔に申し來りしこと、誠に慚愧の至りてあります。一文字も知らぬ人が、一字一字お慈悲の塊りと頂かれることを實に有難きに、皆さんに分りよく聞いて貰はふなど、是れまことに名利に人師をこのむもの。聖人の『悲歎述懷讚』には又

小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ、

如來の願船いままさずば、苦海をいかでかわたるべき。此の淺間しき身を以て、斯く一週日に亘り、聖人の御言葉無遠慮に頂き來りし事、まことに文字知り顔に、名利に人師を好む風情、無慚無愧、淺間しき極みでありませう。全體此の『御本書』は、古來より成る可く拜見せぬやうに言はれてある程尊まれてあるも聖教である。勿論全然見なといふては無けれども、『御本書』を讀むといふは餘りに恐れ多き故、之を講ずる時には、昔より『御本書』を見ると言はずに、六要を讀むと言ひならはされてある程の聖教である。然るに斯く横着にも『教行信證信卷三信釋』と題して長々お話させて頂きたこと、聖人に對し實に申譯なきことと思ふことでありませう。去りながら御在世の時に、既に之を書寫して弟子に御渡しなされたやうでもあり、又女には之を伸べ書きにして、殊に御肉身の覺信尼公に御與へなされたやうにて、覺信尼公の御書狀の端しに、

師父聖人兼て御紀念に残し下しおかれ候廣文類の御仲書、誠に辱く、披き奉るたび毎に、身の嬉しさ心の涼しさ。

とある、其の斷片今に歴々存してある事でもあれば、幸に之を御縁として、聖人直さの仰せに皆様に直接接して欲しさの餘り、斯くは潜越をも省みず、之を題として一週日の間拜讀させて頂きた事でありませう。て今回は之を以て講義の最終席と致し、明日は彌々法主臺下格別の恩許を蒙りて板東報恩寺所藏の親鸞聖人直筆の御真本を、御同やう拜觀させて頂く事である。聖人御真筆と稱する『教行信證』は猶ほ他にも有るのでありますけれども、私は此の報恩寺所藏のものに限ると

ります。而して聖人は、今の『御本書』末文に於て、續いて御本書御製作の思召しを御披露下されて、茲に因つて眞宗の詮を鈔し、淨土の要を撫ふ。唯佛恩の深きを念じて、人倫の嘲を耻ぢず。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因と爲し、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯はさん。

斯の書を信する者には其の信順を因とし、若し疑ひ謗る者ある時は、其の疑謗を縁として、疑ふ者も謗る者も遂には總て慈悲の中に引き入れ、遣る瀬無き願力の力を示して、安養界の妙果に到らしめんとあるが聖人の本書御選述の思召である。斯くして聖人は、續いて『安樂集』の御文をお舉げ下されて、

安樂集に云はく。眞言を採り集めて、往益を助修せしむ。何んとなれば、前に生る者後を導き、後に生れん者は前を訪ひ、連續無窮にして、休止せざらしめんと欲す。無邊の生死海を盡さんが爲めの故なり。

親鸞が此の書を書き遺すは、之れて前に生れた者が、後に生れた者を導きて、彌陀の願海に入らしめんが爲めである。斯くして生れかはり死にかはり、先きなる者は後を導き、後なる者は前を訪ひ、連續無窮にして、無邊の生死海を盡し度いと遣る瀬無き思し立ちなのであります。再々申すことなれども、又『唯信鈔』結末の示しには、

これをみんひとさだめてあざけりをなさむか。しかれども信謗ともに因として、みなまさに淨土にむまるべし。今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして、來世のさとのまへ

思ふこととあります。親鸞聖人が特別の恩典を蒙り、法然聖人の『選擇集』の御製作を書寫なされ、其の事を『御本書』の末文に御喜びなされたお言葉に、

然るに愚禿釋の鸞、建仁辛酉の辰、雜行を棄て、本願に歸し、元久乙丑の歲、恩恕を蒙りて選擇を書く。同じき年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、並に南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本と、釋の縛空の字とを、空の眞筆を以て之を書かしたまひさ(中略)本師聖人今年七旬三の御歳なり。選擇本願念佛集は、禪定博陸法名圓昭の教命に依つて、選擇せしめたまふ所なり。眞宗の簡要念佛の奧義か斯れに攝在せり。見る者論り易し。誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を涉り日を涉り、其の教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎と云ひ、此の見寫を獲るの徒甚だ以て難し。爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖畫す。是れ專念正業の徳なり。是れ決定往生の徴なり。仍つて悲喜の涙を抑えて由來の縁を註す。慶しい哉心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知つて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜彌々至り至孝彌々重し。

○親○鸞○聖○人○が○『○選○擇○集○』○の○見○寫○を○喜○び○な○さ○れ○た○お○言○葉○が○、○即○ち○我○々○明○日○『○御○本○書○』○の○御○真○本○を○拜○見○せ○し○め○ら○る○の○喜○び○で○あ○り○ま○す。○殊○に○聖○人○は○法○然○聖○人○に○、○僅○に○内○題○の○字○、○並○に○南○無○阿○彌○陀○佛○往○生○之○業○念○佛○爲○本○と○、○唯○是○れ○丈○け○書○い○て○頂○いた○丈○け○で○、○之○れ○丈○け○喜○び○な○さ○れ○た○に○、○我○々○は○明○日○面○の○當○り○『○御○本○書○』○全○部○の○御○真○筆○に○、○親○しく○咫○尺○し○て○拜○觀○す○る○を○得○る○事○で○あ

の縁をむすばんとなり。われおくれれば人にみちびかれわれささだば人をみちびかん。生々に善友となりて、たがひに佛道を修せしめ、世々に知識としてともに迷執をたぐん。或は茲にお集り下されてある皆様の中でも、昨年の求道會に御出席下された方で、今年に既に無いて無一人が有るかも知れぬ。又今年遇はせて貰うた我々と雖も、來年ははかられぬこと故、今生夢のうちの契をしるべとして來世のさとの前の縁を結ばんとなり。我おくれれば人に導かれ、我先きたば人を導かん云々。茲に於てか私共も、今生夢の中の契をたよりとして互に聞法の縁を結び、四海の全兄弟唯此の一道によりて、廣大の淨土に往生し、

大小の聖人輕重の惡人、皆な同じく齊しく選擇大寶海に歸して念佛成佛すべし。(行卷)  
の味ひを實現し度いと思ふ事なのであります。爾るに私共何等の幸ぞ、親鸞聖人の此の遣る瀬無き御念力が現はれて、次第相承の善知識の恵みの下に、親しく此の廣大のお慈悲を承るを得、昨年は殊に聖人の六百五十回忌に遇せて頂く事を得た。仍つて夫れを縁に昨年來本會を思ひ立ち、昨年は『信卷』開卷より、此の三信釋に至る迄を講本として、片言まじりに聖人直さの仰せを喜ばせて頂きた事でありませう。爾るに又本年も幸に存命して、斯く皆様と共に御縁に遇はせて貰ふ事を得た。來年も長らへて幸に本會を繼續するを得ば、誠に有難き事と思ふのであります。彌々是れにて一七ヶ日講義も、終りを結ぶ事と致します。南無阿彌陀佛々々々。

『三心釋完結』

●第三會夏季求道會講義次號より掲載す

## 告白

## 私に涙の種

藤本 廣 惠

近角先生が、私に今度御慈悲に氣附かせて頂いたことを一通り書いてみよと仰せられました。が、私はどうして／＼そんなことの書ける様なものではありません。これは遠慮いたさうと、一時は思ひましたが、よく／＼考へてみれば、一通り心のうちを書いて、読んで頂いたがために、信仰の話に耳を傾けて下さる方が、一人でも下さる様なことになれば、それこそ私にとつては、此上もない喜びと存じまして、寧ろ喜んで書かせて頂くことに致しました。

私は今から六年以前に、非常な熱心を以つて、信仰を求めまして、毎日曜には勿論、日曜以外の日にも、學舎に参りまして、先生の講話を聴かせて頂いたのであります。ところが一向わかりません。尤も理窟の上ではよくわかつてありますけれど、心になか／＼會得がでないもので、つまり信ずることもできず、有難くもなんともないのであります。そのせゐか、熱心の度合がいつのまにやら薄らいて参りまして、雨の日や忙しい時は、學舎へ参ることがあつたうになつてきました。それでも何か悲しいことか不愉快なことが起つてくると、また一寸學舎へ、何か氣やすめになる拾ひ物でもないか

席おめするといふのか、人おめするといふのか、顔いろが變つて参りました、ひどく汗がでて、はげしく動悸がして、もの言ふ聲が震ふのであります。暫くすると少しなほり、又再びひどくなり、そしてまた少しをさまり、か様に四五回もひどく／＼おめるのであります。このことが私は苦になりまして、なほしたくて／＼なりません。そこで、信仰でこれをなほさうといふ、悪い心持になつたのであります。

また私は、常に一寸したなんでもないことを、一々手帳に書きつけて、苦しむのであります。足の爪を切ること、か、天井裏の蜘蛛の巣を取ること、か、庭木の枝の枯れ葉を取ること、か、柱の横の錆び釘を抜くこと、か、隣の人に逢ひながら禮を言ふのを忘れたこと、か、すべて目に見ゆるあらゆることが、私の頭の中へ、一つ々々の用事となつてあらはれて、數へてくれば四十にも五十にもなつてくるのであります。その五十からの用事を、一つも忘れぬ様／＼にと、その數々を一々繰返してみまして、若し一つでもその數が足りない時には、サア大變です。物もいはずに氣違ひの様に考へ込むのであります。それで手帳に一々それらを書附けて仕舞へば、いくらか頭が休まるので、そこで時間があれば、その書附けた仕事を一つ宛片附けるので、それが片附くと片附いただけ手帳を消すのであります。そのまた消し方が六かしいので、消した後には、さて之はうまく片附けたのであらうか、一體何だつたらうと、調べる時に、それがわからないまでに消してあれば、また大いに考へ込むのであります。それですから、一つ用事が濟めば、それを十文字で消し、その事を次に調べた

といふ鹽梅で、顔出しをするといふ有様、参つてみたり、よしてみたり、おしまひには、ひまがあれば淺草の活動寫眞の方へ参り、學舎の方へは足が重く、とう／＼参るのが全くいやなくらゐになつてきたのであります。

さういふ風に、いくら聴いても／＼得心できず、随つて熱心の度が、さめて参りました。その當時の、私の求める心持ちを、かい摘んで一寸初めに、書かせて頂きます。

其頃私は、たゞひとりの愛兒を死なせました。それが悲しくて／＼、一緒に坊やについて行きたいくらゐでありました。其時、信仰でも得たら、悲しみがなくなるかと思ふて、求めたのであります。今から思へば、實に勿體ない／＼、信仰でも得たらといふ考へは、なんとひどい心持ちではありませんか。

また私は、實に恐ろしい病氣を持つて居ります。その病氣の起りは、遠く子供の時分からであります。それは普通の病氣ではありません、世にたぐひなきほどの、はげしい潔癖であります。私自身では、かう潔癖がひどくては、人様の中へ出ることもできぬ様になる、是非早くなほさねばならぬと、一年／＼とひどくなつてきたのであります。而もその潔癖を、人様に氣附かれない様にと、なか／＼苦心するのであります。そこで、信心の道にてもはいつたら、少しはなほるだらうと思ふて、求めたのであります。實に恐ろしい心持ちではありませんか。

また私は、あらたまつた席や、めうへの人の前に出ると、

時、消してある所へ第二の十文字を書き、また次に調べた時、第三の十文字を書き、何回でも／＼消すといふ風で、一つの用事の事を、數十回の十文字で、おしまひには全く黒く消されるのであります。常に頭を痛め、殆ど之がために、休まるひまはないので、實に／＼苦しいのであります。これを、信仰の力でなほさうと、求めたので、誠に申譯のない心持ちであります。

また私は、元來僧侶でありまして、常に説教をせねばならぬのであります。ところが下手で／＼實に困るのであります。そこで、信仰の道にてもはいれば、説教が上手になるだらうとの心持ちで、求めたのであります。今更書くのも勿體ない次第であります。

また私は、朝夕の勤行が、面倒で／＼しやうがなかつたのであります。たゞ習慣的に、やらねば氣が濟まぬといふ考へで、忙しい時などは、佛壇や佛像がなければよい、あるから勤めねばならぬので、いつそ佛壇や佛像を、こはして焼いて仕舞はうかとまで、思ひました、實に／＼恐ろしい考へてありました。そこで、信仰に入れば、時間つぶしのあつとも、不足に思はず、うれしく楽しくてさるだらうと、考へたのであります。全く大悪人であります。

要するに私は、今思へば身の毛もよだつほど、恐ろしい悪い心持ちで、信仰を／＼と、求めて居つたのであります。信仰を道具の様にして、佛様にさからつて居つたのであります。そんな心持ちで居つて、どうして御慈悲に氣附かれませう、百年たつても安心のときやう筈がないので、私は、その

苦しいなりて、日を送つて居つたのであります。

ところが昨年、暑中休暇の時、親しい友人が、六七年振り、私を訪ふてくれたのであります。私は喜んで迎へましたが、その友人は、思ひもよらぬ私をひどくのしつたのであります。君は以前、人のできない様な苦學をして、實に感心な人だ、未頼もしき青年だと、僕は深く尊敬をして居つた。君が朝な夕な配達してくれ、牛乳までを、尊敬して僕は少し頂て飲んで居つた。雪の夜明けに、君が配達車の音、僕は骨身に浸んで幾度夜具を蹴つて起こして貰ふたか知れない。汗に瘦せた夏の日の君が顔を見て、僕は晝寝を全くやめて仕舞つた。僕は君を親友として信頼すべき人と思つて居つた。而るに、君の今日の有様、ア、僕は實に君を買ひかぶつて居つた。一日勉強するではなし、何一つ研究せず、たゞお役目に役所につとめ、ひまあれば睡る。全く君は心身共に活動が止んでしまつた。それで君は世に生きて居ると思ふてゐるか、讀むべき書物が買へないのか、それともいろはも忘れたのか、活氣がないにも程がある。多年苦學の結果疲れたのか、床の掛字や、庭木をいぢるほど、早や老衰したか。なぐつてもモイ目が醒めまい、意氣地なし、因循もの、ぐづ、寢惚け、君の如きを友達のうちに數へるのは、けがららしい。これだけの言葉を、形見として絶交する。」と言ふてその友人は歸つて行つたのであります。之を聞いた私、モイ堪へられませんが、思はず拳を握つて、その友人を、なぐらうとしたので、それを見て、友人は、笑つて行つたのであります。私は机にもたれて泣きました。たゞくやくして、家内にもそれを話し

ました。自分の體でも、一日に何度となく拭ひ、手は一日に幾十回洗ふたかわかりません。實に、萬事について、潔癖のひどい有様は、到底人様にも傳へずることはできません。たゞ家内一人に、萬事を、のみ込ませて、神様佛様を扱ふ様に、世話をさせたのであります。そしてあまり、ひどくなつてきましたゆゑ、いくら隠して居つても、そろ／＼人様に知れだしてきたのであります。モイどうしても私は、之をなほさねばならぬのであります。家内は私の潔癖を悲觀して、自殺しかけたことが、數回もありました。今また頻りに泣いて、私を先程から、まだ拜んで居りますし、友人のさびしい覺醒を促す言葉、私は決心せずには居られません。机の傍で家内と共に、とう／＼一夜を泣き明した上、いよ／＼私は決心をいたしました。子供の時から三十有餘年間、焦げついた様にはなれない、恐ろしい潔癖を、斷然其時なほす心になつたのであります。永い間自分も苦しみ、また家内にも苦しませ、許してくれ、モイ今からなほした、決してモイきたない／＼とは、言はぬと家内に申しました。家内も非常に喜びました。其翌日から餘り私の變りがひどいのですから、家内は俄かに手持ち不沙汰の様になつて、それで頭はどうもなにかとまた心配しだしました。私とて、なほしはしたものの、頭がどうもなにか、三十餘年の習慣ですもの、其苦しきは、書くことはできません。なほして却つて苦しむて、かう思ふ通りに習慣がだせないなら、世の中がいやになるとまで思ひました。その苦しみなか、毎日々々役所を歸るとすぐに、牛込本郷四谷と、遠方まで友達を訪問する

ました。而し、つく／＼考へてみますと、之は決して、怨むどころではありません、全く覺醒の言葉であると、氣が附きました。サアさうなると、モイ落着いて居られませんが、オノレ發展せずにはおくれべきかと、深く決心いたしました。その時家内が、乗り出して申しますには、『左程因循でもないのに、因循と思はれ、かなり快調なのに、不活潑と、人様に思はれるのは、第一あなたの潔癖がためてあります。潔癖のために、人中で活動ができなくて、因循に部屋の間で、ぢつとしてゐるのでせう。世間から別物に扱はれ、生きてゐるのか、死んでゐるのかとまで言はれるのも屹度そのためてあります。その潔癖をなほしてくださらぬと、今にモイ人が相手にしてくれぬ様になります。山奥にても二人でひつ込み、人といふものを、相手にせず居られるなら、いくら潔癖をひどくなされても私はちつともいとひません。けれど、そんなことできるものでもなし、どうぞ、私の、いのちにかけてのねがひ、半分だけでも、それをなほしてください。さうなれば私は、モイそれで充分です、どうぞ、なほす様にしてくださいませ。』と、涙を流して私を拜んだのであります。なるほど潔癖は、一年々々とひどくなつて、今はその極點に達して居ります。毎日々々洋服や帽子を、濡れ手拭てふくのであります。書物から煙草入れ、すべて自分のものは悉皆、ふいて／＼破れるまでふいて、その後は、モイ家内にも、いぢらせません。いぢらせる時には必ず手を洗はせませす。洗ふた手では決して障子をしめず、足か何かでしめさせませす。すべて自分のもの、ほかのものは、人様でも品物でも、皆きたないと思ひ

のであります。なんとかして發展せねばならぬと、試験を受けるための書物を借りたり、いろ／＼其方法を相談したり、また私はアメリカに行つて一と勉強したいと考へまして、早稲田の先生の所へ參つたり、會話を研究してみたり、學校への問合せをアメリカの友達に頼んでやつたり、殆んど毎夜十時過ぎるまで、テク／＼と歩きづめ、歸れば机上の、山の如く借りてきた書物の中から、法律の書物をだして讀んだり、會話の本を讀んでみたり、徹夜も何回やつたかわかりません。借りてきたきたない書物も、その儘机の上のせて、その儘それを讀んで居ります。一度なほしたといふた以上は、モイ手拭てふくことはできません、テク／＼歩いて足は痛みます、體は疲れます、夜は寝られませんが、書物はなか／＼讀みきれません、潔癖をだせないのが、苦しくてなりません、はげしい神経衰弱にかゝりました。足の痛みがだん／＼ひどく、と／＼左足は動かぬ様になりました。昨年十一月二十日の夜、左足の痛みのため、熱四十度に昇り、少しの身動きもできぬ様になり、お醫者を迎ふ様になりました。足から腰まで、痛みがだん／＼ひどくなるばかり、熱は降らず、五日たつても七日たつても、悪くなる一方、痛んで／＼晝夜一と目も睡られませぬ。痛みがはげしいため、左脚全體を、皮の切れるほど紐で縛らせたり、大きな灸をすゑさせたり、まるで氣違ひの様に苦しむこと十日間、親切な二三人の友達が、眞剣に心配してくださいます。十一月三十日の晩、外科の名醫を、態々巢鴨の遠方まで、連れてきてくださったのであります。診察の結果、左の臀部に筋炎がきて、はや既に一面に化膿

して居る由、一日も早く、そこ全體の筋肉を、切つて取らねば、駄目だとのことで、ありました。臀部ですから車にも乗れず友達の方々にたすけられて、十二月一日釣臺で入院して、大手術をして貰ひました。手術は無事に済みましたが、サアそれから神経衰弱が、一層ひどくなつて参りました。熱は高くなつてくる、夜は矢張り一と目も寝られず、神経の亢奮實に非常なもの、いろ／＼のこと、氣に掛かり、借りた書物も讀まねばならず、受験せねばならず、渡米せねばならず、潔癖はなほつても苦しくてたまらず、役所の方への勤めもできず、家内も付き添ふて病院にきて貰ふてゐるが、さて自分の留守宅はどうだらう。郷里の母や、名古屋の兄へ、自分の病氣は知らせたいが、知つたらどんなに心配してくださるだらう。毎夜／＼電燈がつく頃から、傷口が、よけいに痛みだしてくる。右の臀部も痛くなつてきた、脊中まで痛む様になつてきた、また切開せねばならぬかしら。之では到底發展どころのさわぎではない、これきり死ぬるかも知れない、自分が死んだら、さて家内はどうするだらう、家内よりも自分、死んだらどこへ行けるだらう、サア之が心配になつてきた。いろ／＼考へたこともみなだめ、一つも役にたゝなかつた、何一つも思ふ通りにならない、きれいに／＼と大切にしておいた體もだめ、だん／＼さびしくなつてくる、手術經過あまりよくない。第二の切開をして貰はねばならぬことになつた。いよ／＼之はモ一駄目だ、サア今度は、行く先が、恐ろしくなつてきた。モ一今度は、以前の様ないろ／＼の目的のためにはなしに、たゞ恐ろしくて、信仰を求めめる様になつ

てきた。私の勤めてゐる役所の主任武田師が、見舞ひにきてくださるたびごとに「病院には入つたら、神経をしづめねばならぬ。自宅ならはいろ／＼の用事も目について、靜かに養生することも六かしいが、かうして自分のと定められた病室で、すべての用事を遠ざけて、病氣の成行きは、醫者看護婦にまかせ、安樂に横臥する以上は、何一つ氣に掛かることは、ない筈である。それでこそ、入院した甲斐がある、是非／＼精神をしづめなされ。」といつても親切に言ふてくださった。醫者の方々も、「さう神経を亢奮させては、いろ／＼苦心の手當も、みた無効になる。」と叱る様に言ふてくださる。連夜飲んではよくないといふ睡り薬も、苦しいために毎晩のみます、それでも一と目も睡られませぬ。益々神経をつかふ、熱は昇る、衰弱はする、モ一到底薬の力もだめ、いよ／＼さびしくなつてきました。明日第二の切開をすると、きまつた晩に、また武田師が、きてくださいました、私は未來が恐ろしいと訴へました。かね／＼非常に御慈悲を喜んで、おいてになる同師は、私の訴へが言ひ終るや否や、「ソレこそである、いろ／＼すゝめても神経はしづまらん、薬をのんでも寝られぬ、病氣はよくならん、行く先さびしい、何一つも役にたゝん、いかにあせつても、なんにもできぬ、今に火の中に落ち込む、全く仕様のないもの、それをやるせなく思召す廣大の御慈悲、餘事を考へるところではない、ヤレ嬉しやと御慈悲にすがるのである。」と、いろ／＼歎異鈔の御文を引いて、なが／＼と、お聞かせくださいました。そして一度近角先生に、きて貰ふ様に、頼んでやらうといふて、同師はお歸りになり

きました。そのお蔭で翌日は、安心して第二の手術を、して貰ひました。その病院の外科の先生と、御懇意な方に、井口様といふ醫者の方がありまして、その井口様に、私は今度非常な御世話になりました、そのお蔭で病院の方でも、私を特別に扱つてくださいました。この井口様も、なか／＼の御信仰家で、毎日位に、私を見舞ふて、くださつて、そのたびごとに、御慈悲の話を、聞かせてくださいました。そして一度近角先生の御舎弟様を、きて頂く様に、頼んでやらうと、申してくださいました。また高輪中學の教師塚原様といふ文學士の方は、私の病氣の初めから、一方ならぬ御心配を、してくださいまして、外科の名醫を連れてくるから、入院の世話から、何から何まで、御心配をかけたのであります。この塚原様もまたなか／＼の御信仰家で、私は武田師を初め、井口様、塚原様、之らの熱心な信仰家の方々に、病氣の初めから御世話になりました、この方々から、切りにおすゝめくださつたのであります。第二回の手術も、無事には済んだのであります。今度の手術は、いよ／＼體にこたへました。常に悪くなつてきまして、十二月十三日、十四日の晩は、うはごともいふたさうですし、危篤の電報を、親戚へかけ様かとまで、家内は心配したさうであります。全く十四日の夜は、實に／＼苦しくて、肺炎になるかも知れんとか、心臓を冷さねばならんとか、醫者も其夜は、非常に心配してくださつたさうです。信仰家の方々に、すゝめられてゐる私は、早く御信心を頂きたいと、あせる様になつた／＼めか、うはご

との様に、夜通しに、近角先生／＼と、先生のお名を、お呼び申して居つたさうであります。十五日の朝、少し熱が降つたと思つた時に、あの地震がゆり出しまして、左程大きくもありませんでしたが、病院の硝子戸ばかりの二階では、なか／＼音も大きく、かなりに動いたのであります。そのためまた熱が降らぬ様になりました、苦しい一方になつてきました。その日の午後二時すぎ、近角先生の御舎弟様と、塚原様とが、きてくださいましたのであります。サア之から御舎弟様の實に御熱心な御話、三時四時五時六時七時八時と、長い間、御退屈の様子もなく、塚原様と代りあふて、いろ／＼とお話をしてくださいました。ところが私は、どうも安心ができません。傍から家内が「こんなにも長い間、御親切に、お話してくださいなのに、少しもわかりませんか、どうぞ、しつかりと聴いてください」と申しますし、時刻はだん／＼、すゝんで参りますし、熱がそろ／＼高くなつてきますし、私はじれつたくて、たまらん様になつてきました。塚原様は「君はまだ餘裕がある、今夜此席で安心がせずとも、明日また聞かせて貰はうと思ふて居る、また先生にも一度きて頂かうと思ふて居る、さつとそれだけの、心にゆとりがあるに違ひない」と申されました。なるほど、たしかに私は、その考へがありました。ところがまた塚原様は「實は先生が、今日、きてくださるところであつたのだが、越前の方から、求道者が、態々上京せられて、今お話の最中ゆゑ、代りに御舎弟が、きてくださったのであります。それで、先生にも、一度は、きて頂いてやるし、また我々も、明日再び話しにきてやる。けれども幾度聴

いても、また先生から聴いても、御信心の道には、さう奇抜な、かはつた話は、あるものではない。つまり同じ御慈悲の話を、繰返し、手をかへ品をかへ、お話をさせて貰ふだけだぞ」といふて、私の心の餘裕を、破つて下さいました。そこで私は、明日といふ望みも、かはつた話をといふ望みも、駄目になつたのであります。今晚安心させて貰はねばならぬと、いよ／＼あせつて参りました。御舎弟様も一時間／＼と、御熱心の上に、御熱心になつて下さいまして、今は、きかない私の布聞に、接近して下さつて、お口の唾も潤れるまでに、眞剣にお話をしてくださる様になつて下さいました。それでも私は、まだ十分わからぬのであります。そこで御舎弟様は、「さう神経はしづまらず、病氣ははか／＼しくない、御慈悲の話は一向わからん、それでは、あなたは一體どうしますか」と切りつめてのお尋ねでありました。私はそのお言葉を聞いて、ます／＼さびしく、いよ／＼かなしくなつてしまつて、こんなに聴いてもわからん、實際モ一仕様がな、私は泣けてきました。これだけに、お聞かせにあづかつてゐながら、いつまでも／＼、わからん／＼とは、申し上げにく、思ひましたけれど、さうかといふて、わかりましたと、うその返答もできず、モ一私は、全く仕方がありませんから、言ひにく／＼はありましたが、思ひきつて、その通りお答へ申しました。どうするつて、お尋ねですが、私は、聴いてもわからず、どうすることもできません、モ一泣くばかりです」と申して、聲をあげて、泣きました。すると御舎弟様は、「さうでせう」と極簡単なお答へでした。私は、これほどに苦んで、

外はないとは、あなたもですか。御舎弟様は、「その通り」と。私はまた、「信心が得られぬとは、あなたもですか、あなたは信心を得て、喜んでおいてになるでせう」と申しました。御舎弟様は「信じた」とりきんで、それで得られる様な我々ては決してない、そんなことでも、できる様な、立派なものなら、如來の御慈悲はいらぬことになる、モ一何一つも、更にできぬのが我々て、そこで如來が、やるせなく思召すのだ」とのお返事。私は、以前には、いよ／＼の目的のために、信仰でもと思ふた。實に間違つて居つた。而し今は、モ一目的もなしに、信仰でもといふ考へも全くなしに、たゞ／＼まじめにいよ／＼の計畫は皆だめ、お醫者や薬では病なほらず、いよ／＼死期が近づいたかと思ふて、たゞ信仰を得たい／＼との、一息張りに、なりましたのに、その信仰を得たい／＼の一息張りが、信仰など得ることできるものかと、頭からおしつぶされましたので、私は「ハハア一息張りに信仰を求めて居りますが、だめなのですか」と申しました。すると塚原様は「信じたといふ、りきんでゐるなら、自力になる、それができるなら、なんでも他の修行もできて、自分で佛になれる、我々は、モ一信ずることも、何もできぬ、どうして信ずる様なことができるものか」と、御舎弟様と、塚原様とに、信じた／＼の私の頭を、さん／＼に、こはされたのであります。六年以前から、信じた／＼と、思ふて居りました私の頭を、尤も初めは、いよ／＼の目的のため、信じた／＼と、思ふたのであります。兎も角も永の間信じた／＼の一息張り、今の今まで、信じた／＼、一ぱいになつて居る私の頭を、信ず

それでもわからず、泣きだしたら、「さうでせう」と、たつた一言の御挨拶、泣くなら勝手に泣くがよい、とのいかに無慈悲な、お言葉の様に、一時は思ひました。次に御舎弟様は、「何でもできる様に、思ふてゐるが、實際は何一つもできず、つとめて病をなほさうとしてもなほらず、信心を得たい／＼と、いくらりきんでみても、少しも得られず、實に我々はみな、あなたもわたしも、泣くより外に、仕方のないものである」と仰せられました。私は少々驚いたのであります。泣くなら勝手に泣けとの、お積りで、「さうでせう」と、御自身方は、チャンと信心頂いておいてになつて、おまへは到底頂けぬ、モ一だめだ、泣くばかりだらうと、私一人を、勝手にせよと、お見捨てになつた、無情なお言葉と、思ふてゐたのに、私一人でなく、我々はみな、泣くより外に仕方がないのだとは、コリヤ御舎弟様も、私の仲間になつて、くださつたのか、道理でなんだか、「さうでせう」のお言葉が、簡單ではあるが、非常に重みのある、力の充分なもつたお聲であつたが、なるほど、「さうでせう」に、意味があつたのである。おまへもさうだらう、わたしもさうである、との意味のために、異様な力がこもつてゐたのである。さうなれば、無情なお言葉と、思ふたのは、濟まなかつた。みんながさうであると、同情してくださつたお言葉であつた。さて、さうなると、みんなが泣くより外はないとは、少し變に思はれる。而も信心得たいといふりきんでも、あなたも得られん、わたしも得られんとのお言葉は、いよ／＼以て變だ。私は早速問ひかへさずには、居られぬ様になつてきた。私は泣きながら問ひました。泣くより

るなんかできるものかの一言で、ひどく／＼、ぶちこはされたのであります。私は初めに、此席でわからずとも、また明日といふ、頭の餘裕を、先づ第一に破られ、今はまた、信じた／＼で、みち／＼て居る頭を、すつかりこはされて、サアいよ／＼之から、どうすればよいか、いつまでも力と頼みにしてゐた、「信じた」の心が、こはされたとすれば、全く全く、私は手のつけ様がないと、がっかりいたしました。御舎弟様は、「實に我々は、信じた」とりきんでも、得られず、愚痴はこぼれる、神経はしづまらん、全く手のつききつたもの、そこをふびんと、思召してください、廣大な御慈悲、その御慈悲に助けられて、大悲のふところすまぬの身となりながら」と、それから歎異鈔第九章の御文を、おひきなされて、「よ／＼案じみれば、天にをどり、地にをどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ往生は一定と、おもひたまふべきなり、……………まことによ／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ。ア、腹もたつ、愚痴もこぼれる、申しわけのない我々」とのお言葉。私は「あなたも、またお兄上様も、腹をたてたり、愚痴をこぼしたり、なさるですか」と尋ねました。御舎弟様は「もちろん、さうです」とのお答へでした。へ／＼さうですか、それではモ一、私は到底、信じられんもの、私は神経のしづめられんもの、私は愚痴のやまんもの、かう考へてくれれば、なんだか私は、乗り氣になつてきました。御舎弟様はまた、「かゝるものを、涙の種と、してゐてくださる親様の御親切」と續けて下さいました。ところが、今の今、泣いて／＼、たら／＼涙を、流して居りました私は、このお

言葉の涙の種といふところが、いつか、つた様に、氣にとま  
りまして、放蕩むすこは、親の涙の種、かたはものは、親の  
涙の種、ハ、ハ、涙の種とは、誰れが、誰れの、涙の種だらう。  
早速私は、

『誰れが涙の種ですか。』

御舎弟様、

『あなたが、如來様の、涙の種です。』

私、

『へ、私が、そんなに、如來様を、泣かせたのですか。』

御舎弟様、

『さうです、あなたが、かういふ病氣にかゝるといふことも、  
神經が亢奮して、どうしてもしづめられぬといふことも、  
何もかも、チャンと昔から知りぬいて、かはいさうである  
／＼と、大昔から、ひき續いて、今も尚ほ、あなたのため  
に、泣いてゐてくださるのです。』

私、

『へ、私のために、泣いてくださる。それでは、私といふ  
ものが、ないなら、泣いてはくださらなかつたのですか、  
私が泣かせて、おいたのですか、この私が、涙の種ですか。』  
御舎弟様、

『親鸞一人がためなりけり、あなた一人が、涙の種です。』

そのとき、その刹那、私は、たゞ何となしに、濟まん、と  
頭が、さがりました。このかたはもの、この放蕩もの、モー  
頭が、あがりません。この私めが、涙の種か、と思ふとき、  
身ぶるひがしました。仰いで視ますと、たゞ病室の白い天

ません。なるほど私から、信ずるのではなかつたのです。親  
様の御慈悲から、信ぜずにはゐられぬ様に、してくださつた  
のであります。ア、嬉し。それから、モー續いて熱があ  
がりません、夜はねむられます、神經は亢奮しませんが、  
はだん／＼よくなりませす。潔癖の苦しいのも、どこかへとな  
で行きました。お醫者の方々は、俄かによくなつたのを、不  
思議に思ふて、おいででした。ところがまた、私は、心配が  
おこつてきました。十五日の晩、あんなに嬉しかつたことが、  
とんと嬉しくない様になりました。サア心配でたまりません、  
家内などを、病室の外へおつばらつて、ひとりでおつと、目  
をつぶつて、嬉しかつた時のことを、思ひださうと、つとめま  
す。一向あの嬉しさが、でしませせん。之はモーにがしてし  
まつたかと、一生懸命になります。すこしづ、嬉しさがで、  
きます。モーこれをにがしては、ならんと子供が風のつなを  
ひつばる様に、眞剣にひつばつて居ります。話し聲が邪魔に  
なつてなりません。肩がこつてきて、苦しくてなりません。  
また御舎弟様と、塚原様とに、きて貰ひました。お二人様は、  
また御親切に、歎異鈔の御文などをひいて『君がそれだから  
涙の種ではないか。』と。私はまた、『一度あれだけ喜んで、あ  
とでそれを忘れてゐるとは、佛様を嘲弄して居る様では、あり  
ませんか。』と申しました。御舎弟様は、『あれだけ喜んだとい  
ふのも、親様が喜ばせてくださったのだ、そしてあとで忘れ  
てゐる煩惱の興盛も、佛かねてしろしめして、そこが涙の種  
だと思召す御慈悲』と四國か、どこかの信者から、『喜んでみ  
たり、愚痴をこぼしてみたり、よく／＼仕様のないもの、い

井、隅から隅まで、一通り見まはして、その瞬間、妙な心持  
ちがしました。乳呑兒が、乳を求めて、親の膝へ、力なく這ひ  
寄りうとして、片手を膝に、かけた様に、如來様の膝へ、  
片手をかけたなら、あた、かい涙が、手の上へ一としづく、ア、  
深い御慈悲と、頭をあげると、大きな、如來様の御目が、  
涙で一ぱいに、なつてゐるといふ様な、心持ちがしまして、  
私は、思はず嬉しいと、聲をあげて、泣いたのであります。  
御舎弟様も、塚原様も、泣いてくださったのであります。其  
時、私は、御舎弟様と思へず、全く佛様の様に思はれて、知  
らずに手を合せて、御舎弟様を、拜んだのであります。こゝ  
のところは、うまく、書けません。たゞア、ア、  
今まで、動かしたこのない、體が、知らぬまに、うつむ  
きになつて手を合せてゐました。ア、永いあひだ、親様を泣  
かせました。モー書けません。ア、  
なんだか初めて、からだ、らくになりました、その晩は、  
朝まで、知らずにねました。その晩は熱が、昇らなかつたさ  
うです。

ア、御舎弟様と、塚原様とが、私の信じたいといふ頑固な頭  
を、信ずるなんかできるものかと、先づ一言でこはして仕舞  
ひ、自力の根性をすてさせ、自分は駄目なものと、頭をさげ  
させて、そして御慈悲に、氣附かせてくださった。いかにも御  
親切な、臨機應變の説き方は、人間わざとは思へません。た  
しかに、親様の御慈悲から、説き方までも、御心配くださつ  
て、このお二人に命じて、くださったのであると、嬉しく／＼  
思ふて居ります。今となつては私は、モー信ぜずには居られ

よく嬉しく思はれる。』と書いて参つた手紙の文句を話し  
て、御親切に聞かせてくださいました。いよく／＼私は、盲人  
が片目だけ、あいた様でありましたに、こゝで兩眼全くあ  
いた様な、心持ちがしまして、はつきりと嬉しくなつたのであ  
ります。家内もまた、私の病氣が、俄かによくなつたことな  
どをみて、驚きをたてまして、御慈悲に氣附かせて貰ふ様に  
なつてくれました。私はそれから、急になほりまして、退院  
することに、なつたのであります。

早速學舎へ参りまして、先生にお目にかゝつて、私は『御慈  
悲を喜んで、あとで忘れてゐることは、丁度親が、子供に菓  
子を見せて、一時喜ばせ安心させておいてあとで舌だし横み  
て、知らぬ顔してゐるのと、同じ様です。』と申しましたら、  
先生は『そのたとへは、間違つてゐる、子供が親から、菓子  
を貰ふて、一時は非常に喜んで、そのあと、すぐまた横着を  
して、親をどこまでも泣かせる、子供の横着いたづらは、親  
は初めから知つてゐる、その横着な子供が、その不孝な子供  
が、そのかたはの子供が、親はひとしほ、かはい、ではない  
か。』と、また兩眼ひらいて、目の、くもりをとつて、くださつ  
たのであります。

私は、御信仰家の方々の、おかげで、六しかつた病氣を、  
なほして頂き、三十年間のひどい、なほしてもなほらな  
かつた潔癖を、知らぬまに、あとかたもなく、拂つて頂き、  
そして永い間苦んだ、大きな、たよりの親様を、氣附かせ  
て頂きまして、心ゆつたりと、以前のいろ／＼の苦しきは忘  
れて、することなすことが生き、と、嬉しくおもしろく、  
職務につける様に、なりました。  
日曜毎に學舎へ参りまして、一枚づ、薄皮を、とつて頂く  
様に、喜んで居ります。  
實に、長たらく、書かせて頂きまして、なんとも申譯が  
ありません。どうぞ、お許しくださいませ。  
大正三年一月二十四日  
いたづらもの 廣 惠

# 如來利他の大悲

(求道學會日曜講話抄録)

近 角 常 觀

## 一 眞の罪惡觀

信仰上注意すべきは、往々近頃の人は罪惡觀といふことを間違へて居る。罪惡觀は、私は悪い者ぢやと思ふことでは無い。悪い者とは誰でも皆な思つて居る。爾るに其の悪い根性を皆な知り抜きて、夫を御見捨て無き慈悲に腹ふくれると、今迄人を相手に色々苦しんだも、人が「あーこう」と、五分々々の根性で、今迄人を當てにし要求した自分の方がすまぬとなる。又「あの人は斯くすべき筈なるに」など當にならぬことを當てにし、苦しんで居た自分の方が申譯け無つたとする。又彌々死ぬとなれば、親が子に別れにくく、恩愛斷ち難い、と思ふは人情上悪くは無けれども、人生より言へば、親が子を當てにして居るものである。處がその當てにし苦しんで居る其處を哀はれとお見捨て無き慈悲なることを頂けば、今迄恩愛斷ち難く、生死盡き難かつたは、此の念佛三昧を頂かなかつた爲め、當てにす可らざるを當てにし、別れ無くてはならぬを、別れともなく思つて居たのである。て聖人は『龍樹菩薩讚』の中に

處が何故他利ては佛力が顯はれぬかと言ふに、「自分は心淋しいな、しかし之を佛は知つて、下さるのである」となる時は、即ち自分が他に利せらるゝ氣持となり、他利となる。それでは自分より佛に向ふもので、何時迄やりても安心はつかぬのである。處が其の私の心苦しき心中を知り抜きて、向ふより「如何にも其の心苦しいは尤である」と言はれた時には、即ち他なる佛が私を愛し下さるもので、利他である。之で無くては私共安心は得させて貰へぬのであります。

## 三 私の話に唯一つ異つた處

猶ほ一つ言ひ度いは、皆様が私の話をきいて安心して下さる人が多い。すると中には近角が何か會得して言ふから、聞いてる中に氣が附くと思はるゝかも知れぬが、然らば無いです。私の話すに唯一つ違ふ處は、他無し。皆んなが「こんなことでは可かぬ、心淋しいやうて仕やうが無い」と言ふて居る處を「可かぬぢや無い、心淋しいのが尤である、惡の止まぬが無理無い、何うかして善く仕度いだらう、人が不足に思へるも尤である。夫れだから其の心を能く察し、涙を以て心配下さるも慈悲である」と、唯これだけである。斯く言ふと、又、其の思召はよく頂いてると言はれるから、今度は反對に言はんならぬ。それは頂いても居られやうが、其の安心は死ぬと思ふと心淋しい處へ、無理にも慈悲を引張り込んで来て、言つて居るのぢや無いか。それでは矢張り人に對抗して居る如く、まだ佛にも對抗して居るものである。寧ろ死ぬとなると、昨日迄有難かつたのも、今日は有難くないのが本當だらうが。其の有難くなれぬ、心淋みしく仕方の無い心中を初めより御承

恩愛はなはだちがたく、生死はなはだつきがたし、念佛三昧行じてぞ、罪障を滅し解脱せし。

即ち此の恩愛斷ち難く、生死盡き難き心中を察しありて、夫れが哀はれとの慈悲に満足して、初めて死ぬる者は仕方なく死ぬると分り、斯る者をお見捨て無き慈悲一つが有難いとなつた處が、眞の罪惡觀である。て、彌々頂く一念になると、私が斯れ程人と張り合つて惱んで居る事や、又死ぬとなれば行く先きの眞つくらな事、又現在信仰を得度いと思ふても得られぬ爲めに苦んで居る事や、又得た上はもつと喜び度いと思つても喜べぬ心迄も皆なよく御承知あつて、「其の喜べぬのが無理で無い、心淋しいのが尤である。て我は夫れが可哀相てならぬのである」とあるが、如來利他の仰せなのであります。

## 二 他利々他の深義

て親鸞聖人は他利々他の深義といふ事を告示し下された。之が昔より分らぬことになつて居るのであるけれども、私は之を今の味ひに引き當てて喜ばせて貰ひ度いと思ふ事である。御存知の如く、曇鸞大師の『論註』に、佛力を談ずる上より言ふ時は、他利て無く、利他てなくてはならぬといふ、所謂他利々他の御教化がある。處が何故他利て無く、利他であるかといふに、他利は衆生より言ふ時の言葉にて、即ち「私共が他なる佛に利せらるゝ」が他利である。又利他は、佛より言ふ時の言葉にて、即ち他なる佛が私を利用して下さるが利他である。即ち私が親に哀れまれ、恵みさるとなる時は他利となり、親が私を恵み愛して下さるとなる時は利他となる。

知ありて、夫れが可哀相て捨て置けぬとある廣大の慈悲である。信仰の問題は唯此の一所故、皆さん御自身々に心中を打ち出し聞いて下さるとよいのであるが、之より少しく私の方より皆さんの意中を推量して、話して見やうと思ふ事である。

## 四 信仰上誰も抱く思ひ

先づ人生問題よりいふに、「成る程さういふ御哀みてまします事は有難いが、それ位のことでは、私の苦しみは抜けぬ。私の五分々々が止まぬ、そこを哀れみ下さるは有難きも、唯夫れだけでは人生の安心がつかぬ」と、之れが皆様の中に最も多からうと思ふ。自分は人生の逆境に泣いて居るに、それを何程哀はれと言つて頂いても、それだけぢや何の力にもならぬ。現に自分は不具者で、人から輕蔑を受けて居る。然るに其の不具が可哀想であるとの仰せてあるが、全體人から不具々々と言はれるさへ苦しく堪えられぬに、其不具が哀はれとては、更に有難う無し。又「自分は修養して惡を直し度いと思ふてるのである。爾るに其の惡が哀はれと丈けて、惡はちつとも直らぬのだから安心はつかぬ」と、「斯う言ふ方が多からうと思ふ。又多いのは信心問題で、「そのことはもう分つて居る。其處さへ有難く頂ければもうよいのであるけれども、其處一つが頂けぬで困つて居るのである。て其處を聞き度いと、懸命に聞きに来て居るに、其の頂けぬのが哀はれ」と言つて貰ふ丈けではらちがつかぬ。然らば厳しく言はずに、もつと頂けるやうに言つて呉れ」といふ心持ちの方が多數で有らうと思ふ。現に昨日も前一旦喜んだ方で、近頃喜びの止まつた方

が来られて、お聖教の文句を示し、「茲は何ういふ意味、彼處は何ういふ意味」とさかれる故、「君そんな事言はずにまあ聞き給へ」と言ふたら、泣かんばかりの態度で「先生そんな事言はずに、何うか茲ひと所を聞かせて下さい。これ一つが分つたら……」と訴へられた。「我々其のこれ一つが分る位なら佛の五劫永劫の御苦勞は入りはせぬのである。又我々不具がイヤイヤと言ふるのであるけれど、不具者が慈悲で完全にならうと力んでるのが根本の間違ひで、佛より汝の不具が可哀相だと仰せられてあるに、不具がよくなれるなど、あらせぬのであります。

五 全く品代りたるお慈悲

又皆さん折角求めてお出で下さるに、私か此方から求めるのては何程求めても頂け無いといふは餘りひどいと思はる、かも知れぬが、私先達で静岡に参つた時、年來信心に苦心した一人の老婆があつて、色々に話したけれども、自分の方より頂く氣で居るもの故、何うしても頂けぬ。私も困つて仕舞つて、最後に「婆さん、お前のやうでは駄目ぢや、到底頂けぬ」と突き放して仕舞つたら、老婆は「ヨロ／＼となつて涙ぐんでしまつた。そこで「婆さん、これから何うするか」と聞き反したら、「もう地獄に行くより仕方がございませぬ」と泣き出した。そこで此の時「其の地獄へ行く者を、捨てぬと言うて下さるお慈悲で無いか」と、ひと言話したら俄に目が醒めた如く、大層喜んで呉れた事があります。斯く迄尊きお慈悲であるに、之を御同やう頭から、一にもお助け二にもお助けと、唯無難作に言うて居て何うならう。又此間は或人は

嘗つて態々四國から法を求めて来て居ながら、之で何うしても御慈悲の届かぬ方があつた。其の方はそれで幾日聞いても何うしても分らぬ。もう彌々仕やうが無いとなつた時、初めて兼ねて仕て見やうが無いと聞いて居たは茲であつたかと、御喜び下されたのであつた。故に斯くお慈悲頂いて人格を高めやうなどは全くたわけた話で、我々は善きも悪きも分らぬ人間なのである。敵を愛しやうと言ひつゝ、世間を敵に見てる人間なのである。「一つ善き所としては無い。其の代はり夫れ程悪しきを皆な御見通しの上での、遣る瀬無さお呼び聲である。この私の悪しき、そのどん底を御承知下さらなければ、佛は態々大悲の苦勞は仕給はぬ。我は皆な汝の其の苦しき所を知つて居る、夫れが如何にも苦しだらう無理は無い。故に救はうと言ふのである」としてのてあります。

七 力なくしてをばる時

先達でも或る御夫人が頻死の病床で言はれるには「私は念佛が出来せぬ。人はもう斯うなつたら念佛が出さうなものだと言つて呉れませぬけれども……」と。こは周囲の皆んなが念佛が出るか／＼と言ふもの故、却つてお慈悲が頻死の身を責める責め道具になつて居るのである。自分ぢやとて喜ばせて貰うて居るなるも、病苦の爲めに口が乾き、稱へ度くも稱えられぬ」との言ひ譯けが先きになつて居るのである。で言はれるには「先生、何やら力なくしてといふ事が有つたやうに思ひますが、そこを一つ聞かして下さい」と。そこで私は早速『救災鈔』を読みあげ

しかるに佛かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせ

北海道より手紙をよこされて言はれるには「前には私の『親鸞聖人の信仰』を読み、如來回向てふかく喜んだのであるが、此の頃は喜びがとまつて、人に對しても冷淡な考を抱き、淺間しき思ひが起つて仕方が無い。猶ほ其の上近頃は佛のお慈悲を一つ研究して見度いとやうの考が起り、又此の信仰で一つ人生に眞面目なる行動を仕て見度いなどと思ふ」と。之ては全く私の本を逆さまに讀まれたものである。「心だにまことの道に叶ひなば、祈らずとも神や護らん」とあるから、神に護られる爲めに、誠に仕やうといふのである。處が我々は何程力んだかて、神が護りて下さる程の値打ちある行動や、又信仰、人格などにて到底至れ無い、絶望の死より外に道無き者なのである。然るに如來の慈悲は茲で全く世間一應の救へとは品代り、「其の何うして善く出来ぬ生れつきての不具者で、誰ひとり善いと言はぬ、その汝の心中が、如何にも不惑て見離し置けぬ」とある遣る瀬の無い御親切なのである。

六 仰せの厳しい丈けお慈悲も深い

佛のお慈悲は斯く言ひ渡しもひどい丈け、御親切も深いのであります。厳しく何うあるかと言ふに、「汝等の信仰は信心といふ藥を飲んで病氣をよくならうといふ、藥飲みの信仰である。信仰をえて苦しみを脱れ度いなどは、何をふざけた事言つてるのか。汝の病氣は五逆十惡といふ、總ての醫者が匙投げた到底直らぬ病氣である」と。斯う言ひ渡された時は、最早や何とも仕て見やうが無い。すると信心慣れの仕た人は、はや直ぐ其の言葉の下から、「あれはあゝ言うてあとて救ひを言はふとするのである」と、先き廻はりを仕て仕舞ふ。現に

られたることなれば、他方の悲願はかくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまして流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の鼎盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて力なくしてをはるとき、かの土へはまいるべきなり。危篤となつて病苦つれば、もう喜ばうと思ふても喜べぬ、唯行く先きが眞つくらなばかり。其の煩惱興盛の仕て見やう無きを佛兼ねて知召して、其の者が可哀相で捨てられぬとのお慈悲なれば、其のやるせのなき御心配に計らはれ参らせて「名残惜しく思へども、娑婆の縁つきて、力無くして畢る時、彼の土へは参るべきなり。自分ももう之で往生一定と、自分で力んできめる一定で無いのである。又

いそぎまいりたきこゝろのなきものを、ことにあはれみたまふなり。

今其方が危篤となつて體弱はり力無くなり、口が乾きて念佛稱へ度くとも稱へられぬ。するとあたりからは「念佛が出来ぬやうでは本當で有るまい、往生には間違無く頂けて居るか」の話ばかりである。「間違ひは無いか」と胸に手を置くから有難い思召の程が分らぬ。「其の分らぬ仕て見やうの無い、其處が親の方では殊に哀はれて仕やうが無いのだ」とのお慈悲であると話したら、聞くなり涙を流して喜び下された事であ





- 一 金貳圓也
- 一 金貳圓也
- 一 金貳圓也
- 一 金貳圓也(第二回)
- 一 金壹圓也
- 一 金壹圓也
- 一 金壹圓也
- 一 金壹圓也
- 一 金壹圓也
- 一 金壹圓也
- 一 金五拾錢也
- 一 金五拾錢也
- 一 金五拾錢也

高松 鹽田伊三郎殿  
同郷 武田宇次郎殿  
本郷 牧田せき子殿  
大森 今田しん子殿  
高松 中村元次郎殿  
東京 増田梅殿  
本所 野澤たか子殿  
新潟 柳澤巖殿  
宮崎 巢山和吉殿  
同 友助殿  
東京 奥野熊右衛門殿  
住吉 波屋殿  
同 江波殿

總計金壹千五百拾貳圓參拾七錢也

累計金壹萬參千貳百

拾圓貳拾壹錢也

右之通りに候也

大正參年貳月廿參日

世話人總代 長尾 收  
會計監督 西澤 善七

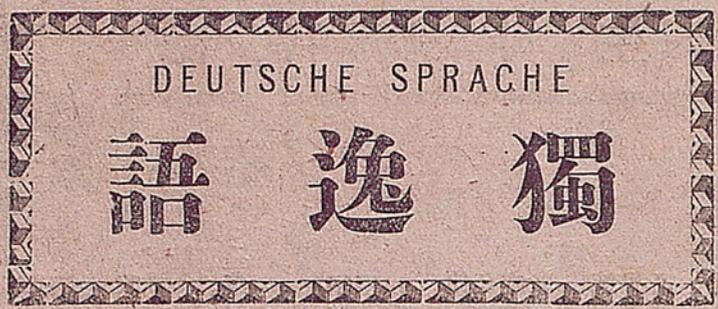
右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候  
二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候  
三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

第三號

三月一日發行



每月一回一日發行 每號四十餘頁  
定價金貳拾壹錢 (郵、稅共)

明星顯はる!!!  
獨逸語界の

△讀書實用兩方面に涉り正確なる獨逸語の普及を期す。

△ドイツチトウム研究の爲め獨逸特有の作物を翻譯し特に獨逸文壇の消息欄を設く。

△内容高尚にして説明懇切なるを以て初學の階梯たると共に研究の好伴侶なり。

△語學文學法學醫學其他の科學軍事等廣く各種の材料を網羅して趣味豊富なり。

△各科何れも一流の専門大家之れを分擔執筆す。

顧問 東京帝國大學文部科學部教授 文部科學博士 フロイレンツ

主筆 東京帝國大學文部科學部教授 青木 昌吉

編輯 第一高等學校教授 三浦吉兵衛

同 第一高等學校講師 上村 清延

同 第一高等學校教授 大津 康

編輯主任 東京帝國大學文部科學部教授 西田 幾多郎

同 東京帝國大學醫學部教授 永 井 潜

同 東京帝國大學法學部教授 三 瀨 信三

同 東京帝國大學法學部教授 末 弘 巖太郎

同 東京帝國大學文部科學部教授 藤 代 禎輔

同 東京帝國大學工學部教授 桂 辨 三

同 東京高等師範學校教授 高 木 敏雄

同 陸軍教授文學士 藤 井 信吉

同 第一高等學校教授 速 水 滉

同 學習院教授文學士 高 橋 周而

同 第二高等學校教授 エミル、エンケル

發行所 東京市本郷區曙町一丁目 獨逸語發行所  
電話 下谷四三九九番 振替口座東京二六六六四番

京都帝國大學總長澤柳政太郎先生推賞に一日

# 清澤滿之哲學及宗教全集第一

明治年間の我が國は物質的方面に於て幾多の人物を生じたりしが、精神界に於ては頗る寂寞の感なき能はざりき。其の間に於て我が清澤滿之師は其短生涯を以てして尙ほ屈指すべき一人たり。師の述作は明治年間の精神上の産物として之を不朽に傳ふべき價値あり。蓋し師の述作たる數行の小品に至るまで深刻なる冥想思索の結果にあらざるはなし。今清澤全集の成るに敢て之を現代並びに後代に推獎せんとする者は此の全集を以て明治年間に於ける精神上の一大産物として

第一篇	宗教哲學	第六	因果の理法
第二篇	宗教哲學骸骨自筆書入	第七	加藤先生に質す（佛教の因果應報論に就いて）
第三篇	宗教哲學骸骨講義	第八	善惡の因果應報に就いて再び加藤先生に質す
第四篇	他力門哲學骸骨試講稿	第九	因果の必然と意思の自由
第五篇	感想錄	第十	個人と社會との關係
第六篇	在床懺悔錄	第十一	宗教と文明との關係
第七篇	教理斷片	第十二	宗教と倫理との關係
第八篇	哲學	第十三	佛教と進化論
第九篇	純正哲學（實在論）	第十四	「佛教と進化論」に對する批評に就いて佛教現利
第十篇	思想開發環	第十五	佛教の効果は消極的なるか
第十一篇	心誠心滅論	第十六	信仰の成立
第十二篇	哲學定義集	第十七	信仰の進歩
第十三篇	哲學問題	第十八	他力信仰の發得
第十四篇	真理の品階及檢定法	第十九	破邪顯正談
第十五篇	真理と事實（真理と宗教に對する批評に就いて）	第二十	祈禱は迷信の特徵也
第十六篇	附錄	第二十一	英文
第十七篇	英文	第二十二	宗教哲學骸骨

菊版布綴天金  
定價百圓五十錢  
郵稅十圓二十錢  
三月廿日限リ  
特價金貳圓

發行所 東京 東振 京替 巢東 町三 二二 二二 五番 無我山房